

タイトル	シュンペーターの生涯と思想(黒田重雄教授退職記念号)
著者	菊地, 均
引用	北海学園大学経営論集, 7(4): 33-62
発行日	2010-03-25

シュンペーターの生涯と思想

菊 地 均

1. シュンペーターに対する評価

明治以来、先進国にキャッチ・アップしようとして、わが国における経済学の研究が海外文献の解釈と翻訳に力を入れたため、この分野の研究は世界でも類をみないほどの業績をあげたのは事実である。その反面、日本人の研究者の多くがまず海外文献を消化することに急で、自らの業績を世界に向けてあまり発表しなかったため、海外で正当に評価されなかったのも事実である。このような趨勢の中で、とりわけ、わが国における経済学はマルクスとケインズが主流となり、それに比べると、ここで取り上げるシュンペーターは、さほど話題に上らなかったといつてよい。

すぐれた経済学者は、単なる経済学者以上の者だといわれることがある。シュンペーターが一般に「社会学者」と称されるようになったのは、1951年に彼の追悼論文集『社会学者シュンペーター』（同書は *The Review of Economic and Statistics* 誌の1951年5月号に収められた論文を中心に再編されたもの）が刊行されてからのことだ。編者である S. E. ハリスはその「はしがき」で、本書は偉大な社会学者シュンペーターの業績を評価し、彼が生涯貫いた真の姿を伝えるために編まれたものだ、と記している²⁾。

この著『社会学者シュンペーター』を繙けばわかることだが、ハーバード大学連合教授会の公式記録として採択された「ジョゼ

フ・アロイス・シュンペーター教授」に関する覚書をはじめ、教授の門下で学んだ人々を中心に、17名の高名な社会学者たちの寄稿からなっており、それぞれの執筆者によってシュンペーターの人となりなどが論じられている。このようにシュンペーターに対する解釈や批判が多面的になされるにつれて、その評価は単なる経済学者の立場を超え、社会学者としてなされるようになった。

1-1. わが国におけるシュンペーター研究

ところで、わが国におけるシュンペーター研究は、彼の純粹理論だけが取り上げられてきた嫌いがある。ただし、それはそれで世界でも例を見ないほど日本の近代経済学の発展に貢献したが、その体系的解釈、あるいは批判的分析という点においては明らかに偏っていた。しかし、後にみるように吉田昇三『シュンペーターの経済学』（1956年）をはじめとして、大野忠男『シュンペーター体系研究』（1971年）、玉野井芳郎「シュンペーターの今日的意味」（シュンペーター著、玉野井芳郎監修『社会科学の過去と未来』1972年）、金指基『シュンペーター研究』（1987年）、塩野谷祐一『シュンペーター的思考』（1995年）、根井雅弘『シュンペーター』（2001年）、吉川洋『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学ぶ』（2009年）などの本格的なシュンペーター論が世に出てから、彼の全体像が次第に明らかになりつつある。

この点については、既に先輩の金指が、わが国におけるシュンペーター研究の導入にかかわる経緯を詳細に解説しているので、その趣旨を簡単に一瞥しておこう³⁾。

(1)戦後わが国経済学界の重鎮、中山伊知郎(1898-1980年)が若かりしとき、ボン大学へ留学、少し遅れて東畑精一(1899-1983年)も留学して、シュンペーターの指導を共に受けたことが、シュンペーターとの師弟関係を確固たるものにした。もちろん中山、東畑以外にも日本からシュンペーターの下へ留学した研究者はいるが、ここでは指摘するだけに留めておく。ことに、中山は学生時代に東京商科大学で高田保馬(1921年6月-1924年2月まで、東京商科大学教授)の経済学史の講義を受講し、シュンペーターの学説に触れたり、指導教授であった福田徳三の下で、クルノーやゴッセン、ワルラスの学問体系を学んだりした。これをシュンペーターが知るに至り、中山を育てた福田を高く評価していたことを、中山自身が帰国後、ある雑誌に語っている。

(2)このようなつながりに加え、1931年1月にシュンペーターを日本へ招請した。彼の来日は若い経済学徒に多大な影響を与え、世界的にみても、わが国では比較的早い時期に彼の翻訳が進んだ。例えば、1936年には木村健康、安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』、翌37年には中山、東畑訳『経済発展の理論』、1950年には中山、東畑訳『経済学史』がそれぞれ大手出版社から刊行されるに至る。中でも『本質と主要内容』の原書は1908年に出版された後、いくつかの不備があることからシュンペーター自身が絶版としたため、彼の生前における初版の翻訳は、日本語版しか許可されず、没後1982年になってようやくイタリア語版が刊行されたにすぎない。定かではないが、原書の初版は500部しか印刷されず、彼の没後に第2刷(1970年)、ファクシミリ版(1991年)、第3刷

(1998年)が出版されたが、今日に至っても、英訳は現われておらず、今後のシュンペーター研究のためにも、こなれた英訳が望まれるところだ。

(3)その後、ハーバード大学へ移ったシュンペーターに親しく師事したのが都留重人(1912-2006年)である。都留はミッドウェー海戦のさなか、1942年6月に帰国の途に着くまで、約十一年間にわたって米国で過ごした人物である。彼は、満洲事変が勃発した1931年9月に渡米し、ウィスコンシン州アップルトンにあるローレンス・カレッジで二年間過ごした。その後ハーバード大学へ転校、卒業後大学院へ進学し、都合九年間を経済学の研究に費やし、その間シュンペーターの下で学んだ。

戦後、都留は連合国軍総司令部(GHQ)支配下にあったわが国が再建をはかるに当たり、大いなる力を貸すこととなる。その後の彼の経歴を紹介すれば、1946年、連合国軍総司令部経済科学局調査統計課に勤務し、翌年に片山内閣の下で、経済安定本部部員に任命され、ここで第1回経済白書『経済実相報告書』を執筆し、その後、東京商科大学教授に就任し、学長にまで上り詰める。

このようにわが国におけるシュンペーターへの取り組みは、すでに1世紀近くの歴史があり、資本主義論においてはもとより、イノベーション論、企業家論においても、シュンペーター研究の再評価が進んでいる。

戦後の日本の経済学界を振り返ってみると、近経かマル経かの二者択一の議論にはじまり、1950年代、60年代はポスト・ケインジアンへの関心が高く、70年代はマネタリズム、合理的期待形成学派、特に70年代後半はサブライサイド経済学、80年代は実物的景気循環理論(リアル・ビジネス・サイクル理論)を中心として、その間、いくつかのケインズ経済学の批判やそれに取って代るものが現われては消えていった。現在は、環境経済

学や進化経済学、現代制度派経済学、複雑系経済学の台頭などで、学界も文字通り混沌としている。

このことに、経済学が時流に対応しようともがいている姿を垣間見る想いだ。

今日に至って、ケインズや新古典派経済学に対する批判や反動などから、シュンペーターに関する研究が急速に増えつつある。シュンペーターの魅力は何といってもトリックスターとして活躍したところにある。これに呼応するかのように諸外国でも顕著になり、1986年には、ドイツのアウグスブルク大学(バイエルン州アウグスブルク市)に本部を設け、「国際シュンペーター学会」(International Joseph A. Schumpeter Society)が発足し、名実共にシュンペーター研究が国際的な規模で語られるようになった⁴⁾。

2. シュンペーターの思想形成期⁵⁾

2-1. 幼少期

1883年2月8日、ジョゼフ・アロイス・シュンペーターは、オーストリア＝ハンガリー帝国メーレン州トリーシュ(現在のチェコ共和国ツレスチェ)において生まれた。日本では文明開化の象徴として外務卿・井上馨が社交場として鹿鳴館をオープンした年(明治16年)に当たる。

シュンペーターの生まれたこの一帯はモラヴィア地方と呼ばれ、世界史に残る名だたる人物が綺羅星のごとく輩出したところである。例えば、哲学者として有名なE.フッサール(1859-1938年)や精神分析学者のS.フロイト(1856-1939年)をはじめ、作曲家のL.ヤナーチェク(1854-1928)、画家のアルフォンス・ミュシャ(1860-1939年)などがある。

伝えられるところによれば、先祖はモラヴィア地方に15世紀に定住したといわれており、父ジョゼフ・アロイス・カール・シュンペーターは祖父以来、トリーシュにおいて

織物業を営む企業家であった。母ヤハンナ・グリューナーは近隣のイーグラ出身で由緒ある家柄の医師の娘であった。

シュンペーターの両親は1881年9月3日に結婚した。ところが1887年、すなわちシュンペーター4歳のとき、父は亡くなったため、母の故郷イーグラへ一旦移り、その後1888年、グラーツに移る。そこで五年間国民学校に通いながら、しばらく母の手ひとつで育てられた。

ここでわれわれは、祖国チェコおよび彼が学び育ったオーストリアの歴史をごく簡単に振り返ってみたい。

チェコの歴史は5～9世紀の大モラヴィア帝国から始まり、その後ブシェミスル家の手でボヘミアへ統一された。14世紀にはドイツの勢力下に置かれるが、神聖ローマ帝国皇帝のカレル4世の治世にチェコ黄金時代を迎える。16世紀に入るとハプスブルク家が新たな王として君臨し、その後30年戦争へと発展、以後300年余り暗黒の時代が続く中、1867年にはオーストリア＝ハンガリー帝国が成立する。第1次世界大戦後、帝国の崩壊と共にチェコスロバキア国が誕生する。1989年、世にいう「ビロード革命」を経て、1993年にはチェコとスロバキアが平和裏に分離・独立し、新たな時代が始まる。

オーストリアの起源は976年、ローマ皇帝による東辺境領の設置に始まる。1273年に国王としてハプスブルク家のルドルフ1世が選ばれ、以後700年にわたりハプスブルク家によるオーストリアと周辺諸国の支配が続く。1772年に対仏同盟戦争が勃発し、ナポレオンとの戦いに敗れた後、和約を締結する。ナポレオン失脚後のウィーン会議(1815年)では一時、オーストリアの国際的地位が高まるが、1848年に革命が起き、立憲政治の時代へと移り変わる。1867年にプロイセンとの戦争に負けたことにより、王はオーストリア、政府はハンガリーが統治するオーストリ

ア＝ハンガリー帝国が誕生する。その一方、ドイツ、イタリアとも三国同盟を結ぶ。しかし、統治国への強引な政策は1914年にサラエボでの皇太子夫妻暗殺事件を引き起こし、第1次世界大戦へと発展した。1918年に休戦条約が締結され、敗戦国となったオーストリアは共和制となり、ハンガリーもこれを契機に独立国となる。

このような両帝国の歴史の中、1893年9月9日、シュンペーター10歳のときに、母が、かつてテレツィン駐屯軍の司令官で退役時に陸軍中將まで上り詰めたドイツ系ハンガリー人の血を引くジギスムント・フォン・ケラー（1828-1913年）と再婚した。32歳の母が65歳を過ぎたケラーと再婚したのは、子供に最良の教育を受けさせたいと願う親心からであったといわれている。当時、ケラーは病気がちで、経済的には決して豊かでなかったが、なんといっても準貴族であった⁶⁾。

このようなことから、シュンペーター家の新しい生活はウィーンで開始されることとなった。もちろん、子供を大きく成長させるためには、ウィーンでの生活は母子ともに望むところであった。

2-2. ウィーン時代

それというのも、貴族の子弟のための中等教育機関として、女帝マリア・テレジアが1746年に創設したウィーン郊外のテレジアヌム（Theresianum）に息子を通わせることができたからである。シュンペーターは10歳から18歳までそこに通い、そこでいち早くギリシャ語、ラテン語の古典はもとより、フランス・イタリア・イギリスの現代語等に至るまで、彼の天賦の才能はこれらをことごとく吸収し、将来に大きな希望を抱かせるに十分だった。当時、テレジアヌムでは、ギリシャ語は週五時間組まれており、それを五年間、ラテン語に至っては週六～八時間組まれており、八年間、それも必修科目として学び、

そのほかギリシャ・ローマの古典を身につけ、同時に抽象的思考能力を訓練されたと記録されている。シュンペーターが身につけたガベルスベルガー式速記術（1834年にドイツでフランツ・クサフェール・ガベルスベルガーによって考案されたもの）も文献上では確認できていないが、この時期に修得したものなのだろうか。

その甲斐あって1901年、シュンペーターはウィーン大学法学部（当時は法・国家学部）に進学した。ヨーロッパの大学の大部分がそうであったように、当時経済学は法学部で学ぶしかなかったことを想起されたい。ハプスブルク帝国の官吏を養成するための同学部は、オーストリア学派の牙城であり、後で述べるように、彼はここで経済学に眼を開かされたのだ。卒業後の翌年、すなわち1906年2月16日、ウィーン大学法学部での学位取得のための口述試験に合格し、法学博士の学位を授与される。

安井琢磨は、シュンペーターがウィーンで育った時期を次のように見事に描写している。かつてウィーンの街を取り囲んでいた城壁の跡地にできたリング通りの建設が殆ど完成しており、鉄道馬車は電化され市街電車となり、ガス事業と電気事業は私的資本家の手を離れ市営化され、そして森林牧草地帯が新たに創設されたため、緑地の喪失が防止され、世界都市ウィーンの様相を整えつつあったときだ、と⁷⁾。

こうした環境の下で、アンファン・テリーブル（恐れるべき子供）といわれたシュンペーターの学生生活は終わり、1907年、その仕上げの意味をも含め、ベルリンで開かれたグスタフ・シュモラーの夏季セミナーに参加し、その足でフランスとイギリスへ渡った。

イギリスではロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの研究生となり、社会学研究のエドワード・A. ウェスターマーク教授（1862-1939年、ヘルシンキ生まれの社会

学・文化人類学者)、幾何学・応用数学・優生学研究のK.ピアソン教授、人類学・民族学研究のA.C.ハッドン教授より直接指導を受ける。

その時、運命の出会いをしたのがグレイディス・リカード＝シーバー(Gladys Ricarde-Seaver)嬢である。彼女は、イギリス国教会の聖職者の娘で、一回りも年上であるにもかかわらず⁸⁾、彼は何のためらいもなく妻として娶った。教会で式を挙げた様子はなかったようだが、結婚の立会人は、シュンペーターの親友のハンス・ケルゼンであったといわれている。ケルゼンは後に、国際的に著名な純粋法学者になり、また1920年に採択されたオーストリア共和国憲法の起草者にもなった人物である。

イギリスでのシュンペーターの滞在は、一年という短期であったにもかかわらず、ケンブリッジ大学教授のA.マーシャルやオックスフォード大学教授のF.Y.エッジワースなどを訪ねている。ことにマーシャルとの会見は彼にとって大変思い出深いものであったらしく、シュンペーターをして、「マーシャルの『原理』はすべての経済学者にとって必読書です⁹⁾」と言わしめたほどであった。後日、彼はその理由を問われ、こう答えている。「マーシャルは、経済学が進化論的科学(evolutionary science)だということを悟った最初の経済学者の一人であったからだ¹⁰⁾」と。さらに、その滞在期間中、シュンペーターは大英博物館に通うなどして、処女作『本質と主要内容』の準備に充てていたようである。そうこうしている内に、彼はカイロで職を得ることになる。

カイロでは、彼は国際混合裁判所の実習生の傍ら、女王の財政顧問として第一歩を踏み出した。ここでのエピソードの一つとして、彼は女王の財政顧問として大きな功績を上げたにもかかわらず、自分の取り分は法的に権利が保障されている分だけしか受け取らな

かった。当地での生活は、法律家として実習をこなしながら、将来を見据えて研究を重ねていたようである。なぜなら、彼はここカイロで処女作『本質と主要内容』(序文の日付は1908年3月2日)を脱稿し、同年10月22日、同書をウィーン大学法学部教授会へ教授資格取得(Habilitation)のための論文として提出しているからである。

大学時代を振り返ってみると、最初にS.アドラー教授のオーストリア国家・法制史演習を受講し、この演習には大学時代を通して通った。その後、R.マイヤー政府局長の財政学演習、フィリップヴィッチ教授、大蔵大臣からウィーン大学の教授として学界に振り返り咲きたベーム・バヴェルク教授、カール・メンガーの後任としてウィーン大学に着任したヴィーザー教授の各経済学演習に顔を出したり、中世の専門家であり、ドイツの歴史学派の流れを汲み、政府中央統計局の局長でもあるイナマ・ステルネック名誉教授と、後に彼の地位を継いだF.ユラシェック宮廷官との共同指導による統計研究演習に三学期にわたって籍を置いたりした。その他、E.シュヴィン教授のゲルマン法演習などにも参加していた¹¹⁾。

ウィーン大学では一学年二学期制(10月～1月の冬学期、3月～6月の夏学期)を採用していたので、シュンペーターは1905年7月の卒業するまで、八学期を費やし、それぞれの学期ごとに演習を履修し、その後、官吏になるための国家試験の対策と学位取得のための口述試験の準備とに当てていた。将来大学の教授を目指には、その上で、教授資格試験に合格する必要がある。

ところで、このウィーン大学は、ヨーロッパ最古の大学の一つで、1365年に創立された帝国の総合大学である。シュンペーターが入学したころは、前述したような都市改造によって旧市内から現在の位置に移ったばかりであった。かつて、街を取り囲んでいた城壁

の跡地にリング通りという環状道路ができ、それに沿って帝国の威光を示すルネサンス様式の大大学をはじめ、19世紀の後半以降に建てられた多くの重要な世界的建造物が建ち並ぶ。例えば、シュテファン大寺院、ホーフブルク王宮、国立図書館、自然史博物館、美術史博物館、ブルク劇場、国立オペラ劇場などである。

シュンペーターが、貴族の子弟が通うエリート校テレジアヌムを経て、ウィーン大学を卒業するまでの1893-1906年は、ハプスブルク家が没落を間近にひかえて、最後の光芒を放った絢爛たる世紀転回期の一齣の時期であった。

当時のウィーンの世界・文化の状況は、グスタフ・マーラーが宮廷オペラ劇場の監督・指揮者としてタクトを振り、カール・クラウスが雑誌『ファッケル』を発刊し、ジグムント・フロイトが『夢判断』を発表し、精神分析の基礎を据えたのもこの時期であった。また、テオドール・ヘルツルがシオニズムの起点となる『ユダヤ人国家』を発表し、グスタフ・クリントとその一派は分離派を結成し歴史主義絵画との絶縁を宣言し、モダニズムへの途を切り開きつつあった時期でもある¹²⁾。

いずれにせよ、シュンペーターにとっての世紀末ウィーンは、自らのアイデンティティを形成するのに多大な影響を与えた「かの神聖で豊饒なる十年間」¹³⁾であったと思われる。

その当時の最も傑出した少壮マルキシストの両雄、オットー・バウアー（第1次世界大戦後の革命期に外相に就任、主要な著書は『帝国主義と他民族国家』『ボルシェヴィズムか社会民主主義か』など）とウィーン大学医学部を卒業したルドルフ・ヒルファディング（主要な著書は『ポエム・バヴェルクのマルクス批判』『金融資本論』など）はゼミナールで机を並べてよく議論しあった学友である。

その他、ルードウィヒ・E. v. ミーゼス

（主要な著書は『社会主義国家における経済計算』『人間行為学』など）、エミール・レーデラー（1923-25年まで東京大学で教鞭をとっていた。主要な著書は『景気変動と恐慌』『技術進歩と失業』など）、M. アドラー（主要な著書は『マルキシズム方法論』『マルクス主義の国家観とマルクス主義』など）、V. アドラー（第1次世界大戦後の1918年、レンナー政権のときの外相、主要な著書は『ビクター・アドラー論文・演説・書簡集』など）、K. M. レンナー（1918-20年内閣長、宰相および外相を歴任、1931-33年国会議長、1945年オーストリア暫定政府首相、1945年12月以降、共和国大統領、主要な著書は『マルクス主義・戦争・インターナショナル』『民族自決権』など）などがいた。

その間に彼は、統計的方法についての論文を書き、F. ケネーやA. A. クールノーの文献を読み漁り、やがてワルラスの一般均衡理論の体系に心から陶醉していった。

このように、彼の思想的基盤は一方で、ドイツの歴史学派の流れを汲むイナマ・シュテルネック、フィリポヴィッチ、他方でオーストリア学派のメンガー、ベーム・バヴェルク、ヴィーザーを引き継ぎながらも、オーストリアのネオ・マルクス主義との交流の上で、出来上がったものだ。

母校ウィーン大学法学部への就任との関係でいえば、1918年にフィリポヴィッチの後任人事の選考を同学部は行なった。その時、ウェーバーの推薦があったにもかかわらず、ローザンヌ学派のワルラスの流れを汲むという点では、必ずしもオーストリア学派の伝統を重んじなかったことや、マルクスに対する共感がベーム・バヴェルクと好対照をなしていたことや、ヴィーザーが快しとしなかったことなどが重なって、母校ウィーン大学の教授になれなかったといわれているが、本当の理由は不明である。当然、その後幾度となくチャンスはあったと思われるが、この経緯に

については「大学の歴史上、永遠の謎として残るだろう」¹⁴⁾と E. シュナイダーが語っているところをみれば、真実は霧に包まれたままである。

2-3. 処女作『理論経済学の本質と主要内容』の出版

シュンペーターの処女作『理論経済学の本質と主要内容』は、純粋経済学の認識論的本質と理論的主要内容を統合させることを試みたものである。しかし、残念ながらこの試みは成功したとはいえないが、純粋経済学の方法論的評価と解釈を試みた点は高く評価されてしかるべきだ。ただし、「『すべてを理解することは、すべてを許すことである』という格言には、もっともな意味がある。一層適切にはなお次のように言うことができよう。すべてを理解する人には、許すべきものは何もないと言うことがわかる、と。そして、このことはまた知識の世界にも妥当する」とはじまるこの本がいつ、どこで書かれたかは、シュンペーター七不思議の一つである¹⁵⁾。

おそらく事前に構想を練っていたに違いないものの、ロンドンの大英博物館に通い、しかもカイロで脱稿したのは事実だが、それにしても大学卒業後、わずか二年間で仕上げたのを見るにつけ、早熟の天才といわれるゆえんが理解できる。シュンペーター25歳のときである。

われわれは、ワルラス研究の第一人者ウィリアム・ジャッフェ(1898-1980年、ニューヨーク生まれ。コロンビア大学、パリ大学で学び、ノースウェスタン大学、カナダ・ヨーク大学で教授を歴任。東畑精一によれば、ジャッフェはボン大学時代のシュンペーターを訪ねている)によって、クールノーからワルラスへの引き継ぎや、それぞれの研究の違いをここに示すことができる。

「ワルラスによれば、クールノーこそが経済学への数学の応用を明示的かつ適切に試み

た最初の人であった。ちなみにワルラスは、その方法を教えてもらったことについて、クールノーに深い感謝の念を表明している。しかし同時にワルラスは、自分自身の研究のたどった方向が独自のものであり、クールノーのそれとはまったく異なっていることをも強調した。まずワルラスの経済学は、次の点でクールノーのそれとは異なっている。すなわち、ワルラスが『自由競争』を一般的な事例と考え、それを出発点として、独占を一特殊ケースとして研究したのに対して、クールノーは逆に独占を出発点として、そこから一步一步制限のない競争へと進んだという点がそれである。また、ワルラスが指摘しているところによれば、用いられた数学も異なっていたのであって、彼が形式的証明のために主として依拠したのは解析幾何の初等原理であったのに対し、クールノーはもっぱら微積分学に頼ったのである」¹⁶⁾。

ジャッフェによれば、限界効用は誰が最初に言ったかという件については、いまだはっきりせず、しかも、レオン・ワルラスの限界効用の発見を直接に喚起したのが父オーギュスト・ワルラスではなかったことは確かなようだ。そうであれば、誰だったのだろうか。クールノーか。しかし、クールノーは慎重にも需要に対する効用の関係についての分析から身を引いていたのである。つまりレオン・ワルラスが最終的にその問題を解いたところの方法を示唆する文献は、いまだ一切見当たらないというのが本当のようだ。

いま一つ、ジャッフェはあえて当時の状況を斟酌し、ワルラスがこれしか習得できなかった理由を、彼自身の不十分な数学の訓練と、フランスにおける微積分学の教育の遅れにあったこととを明らかにし、彼を擁護する。実は、最初の微積分学の教科書がフランスに現われたのは、1860年代になってからである。I. ニュートンと G. W. ライプニッツの微積分法に関する先取権争いがあったから、実

に二世紀以上もたっていた。「限界革命」におけるワルラスの貢献は、明らかに一般均衡モデルの中で市場機構を作用させる上で、微分係数を用い、それを生産理論へ適用したことだが（究極においてはその資本形成および貨幣保有への拡張をも含むのだが）、実際には彼の『純粋経済学要論』（1874-77年）が出現するまで待たねばならない。

このようにワルラスの限界効用は、彼の『要論』以前に確立しているが、それがどのような人びとに影響され、どのように形成されるに至ったかについては、依然として謎に包まれている。われわれの知る限りでは、例えば、フィリップ・ミロンスキーの調べによると、ローザンヌ大学の同僚であった力学教授のアントアヌ・P.ピカールや数学者ハーマン・アムシュタインを通じて力学的エネルギー保存則から導入されたというが、いまだ定説に至っていない¹⁷⁾。

ワルラスの研究はその後、V. F. D. パレートに引き継がれるが、しかし、パレート自身がワルラスをあまり評価しなかったため、その研究は発展的に解消されるはめになる。結局のところ、無差別曲線による選択理論や、厚生経済学におけるパレート最適などのアイデアを提示したパレートの『経済学提要』（1906年）がこれに取って代わり、新古典派経済学の主流になる¹⁸⁾。

これに対してシュンペーターは、自著『本質と主要内容』の第1部第6章「方法論的個人主義」でパレートのような展開をせず、どちらかといえば、当時台頭しつつあったマッハ主義的な立場、すなわち道具主義（instrumentalism）的な立場を取りながら、方法論的個人主義（methodological individualism）を貫いた¹⁹⁾。これらに関する精緻な研究は、1950年代から60年代にかけて社会学の領域で興味をもたれたが、経済学では、フォン・ミーゼスなどは別として、ほとんど影響を及ぼさなかった。

なぜそうなったのだろうか。塩沢由典はその著『近代経済学の反省』（1983年）の中で、シュンペーターの方法論的個人主義については、政治的個人主義との峻別には貢献があったかもしれないが、方法論的個人主義の擁護においては古い存在論しか述べていない、と次のように批判する。「オーストリア学派から出ていちはやく一般均衡論に改宗したシュンペーターが方法論的個人主義を熱烈に擁護したのも偶然ではあるまい。かれはオーストリア学派のもつさまざまな異端的要素——因果性へのこだわり、交渉過程の重視——等をたくみに脱色、無害化してワルラス体系への『よき』橋わたしをしたが、それは一般均衡論の理論的必要をよく見抜いていたからであろう²⁰⁾と。

また、吉田昇三は、M. ウェーバーとの比較からシュンペーターの方法論的個人主義に対して、別な見解を展開している。「シュンペーターのこの区別〔方法論的個人主義と政治的個人主義〕は、もともと、古典学派経済学のなかでは、この二つが密接にむすびついていたのにくらべて、近代の理論経済学の場合には、その個人から出発〔する〕マイクロ分析的立場は、政治的個人主義とはなんの関連をもつものではなく、『理論からは政治的個人主義を支援する議論も反駁する議論もえられない』とし、^{アトミズム}原子論の批判から近代経済理論の方法論的立場を防御することを目的として導入されたものであって、その意図するところは、方法の側面における『没価値性』の主張であった²¹⁾と。このように方法論的個人主義は元来、認識上の問題であって、政治的な理念ではない。

もともとマッハの哲学が現われた背景には、古典力学に対する批判があった。例えば、竹内啓が次のように語っている。「19世紀後半の物理学、ことに力学は、ニュートンの建てた基礎の上に、近代解析学の発達とともに、厳密な理論体系として完成されていた一組の

微分方程式が、物理のすべての運動を誤りなく記述するものとみなされていた。そこから直接観察できない『形而上』的な概念は除かれ、ハミルトン〔1805-1865年、イギリスの数学者、理論物理学者、天文学者〕の方程式に見られるように『力』さえ追放されて、運動量の変化におきかえられた。『因果関係』という概念も、観察可能な世界には存在しないものとして、『関数関係』にとって代わられることになった。この時代の物理学の思想はマッハの哲学に現われることはいまでもない²²⁾。

なぜ彼は『本質と主要内容』において、こうした道具主義的方法を用いたのだろうか。

それは経済学の形而上的な説明を意図したのではなく、むしろ塩野谷の解釈のようにマッハの道具主義を隱喩的に適用したものにすぎない。なぜなら、「仮定や仮説は人間の恣意的な構成物であって、それ自身を事実によって正当化する必要はないと主張する。また仮定から演繹された理論はそれ自身記述的の言明ではなく、事実を理解し説明するための道具である。したがって理論は真でも偽でもなく、それが多くの事実をカバーするとき有用である²³⁾」からだ。したがって、このように仮説の恣意性と理論の現実適合性を強調するマッハ的思惟の経済性の原則から、シュンペーターが影響を受けていることは明らかである。

なお、この時代のシュンペーターの主な読み物は、マッハ以外には、スペンサーやポアンカレ、デュエム、ショーペンハウアー、G. B. ヴィーコ、H. ベルクソンなどが対象となっているが、実際にどの程度彼の学問体系に影響を与えたかは議論のわかれるところである。われわれが論文を書くに当たって、単なる用語の類似性から無理に憶測し、シュンペーターに当てはめることだけは慎まなければならない。

経済学が科学として自律することの意味、

ないしはその必要性については、別の機会において言及するとして、彼の著『本質と主要内容』は、純粋な経済理論を厳密に規定しその方法論的限界がどこにあり、いかなる意味をもつかを示したという点で、きわめて多くの成果をわれわれに残しただけでなく、示唆を与えてくれたことになる。

2-4. 「国際シュンペーター学会」発足

確かに、経済学者の一部にはシュンペーターを評価しないもの者もいるが、わが国の近代経済学のスタートはシュンペーターからだといっても過言ではない。これから述べるようにシュンペーターに関する研究も1986年の「国際シュンペーター学会」(ISS)の発足を機に、大きく変わったと認めざるを得ない。シュンペーターが今日において取り上げられるゆえんは、その理論体系もさることながら、こうした経済学の科学としての自律性を主張し、進化経済学、制度派経済学、複雑系の経済学の先鞭をつけたことの意義が高く評価されているからに他ならない。

最後に、われわれが課題として取り上げるとすれば、19世紀の経済学方法論における4半世紀の空白——すなわちN. W. シーニア、J. S. ミル、J. E. ケアンズ、J. N. ケインズ(ケインズの父)の方法論からいきなり、現代のL. ロビンズ、T. W. ハチスン、F. マッハルプ、M. フリードマンの方法論に至るその間の空白——を埋める作業が残されている。とりわけ、塩野谷も強調してやまないミルからマーシャルに至る方法論的展開のあとを整理し体系づけたJ. N. ケインズの『政治経済学の範囲と方法』(1891年)やマーシャルの『経済学原理』(1890年)と、シュンペーターの処女作『本質と主要内容』との比較研究が重要である²⁴⁾。

J. N. ケインズはこの本の中でも述べているように、マーシャルからのアドバイスで、ドイツの経済学方法論に関する文献を相当読

んでいる。シュンペーター自身は言っていないが、彼が処女作を構想する各段階で J. N. ケインズから相当影響を受けているとみてよい。

というのは、シュンペーター自身が寄稿した「ジョン・メイナード・ケインズ — 1883-1946年」(*American Economic Review* 誌, 1946年9月)の中で、次のように論述しているからだ。「この感嘆すべき本〔J. N. ケインズ『政治経済学の範囲と方法』〕がすばらしい名声を博し、成功を取めたことは、その第4版〔1917年〕の再版が1930年近くまで続いたことからもうかがえる。事実、この問題についての半世紀にわたる論争の大濤や暗礁の真っ只中で、本書がよくその地位を保っているのが、現在においてもなお、方法論的研究家にとっては指導書としてこれを選ぶより途はまずないのだ」²⁵⁾と。

また、M. ブローグもその著『経済理論を回想して』(1962年)において、新古典派の方法論を取り上げ、「方法論の独習はまず、J. N. ケインズの傑作『政治経済学の範囲と方法』(1891)からはじめるべきである。この書物は経済学における方法論争の伝統的な問題のすべてに触れているばかりでなく、指導的な新古典派の著者たちの方法論的態度を忠実に反映している。もっと近年になって、議論のすべての出発点となっている基準は、L. ロビンズの『経済学の性質と意義』(1932年)である。だが、ケインズが既存の方法を合理化しようと努力しているのに対し、ロビンズは新しい方法を取るよう研究者に呼びかけている」²⁶⁾とケインズとロビンズの立場の違いを際立たせているが、その間の空白を埋める作業はブローグといえども手をつけていない。

この問題は、今後のシュンペーター研究との関連で経済学者の間で大きな課題になるとみてよい。

2-5. ワルラスを訪ねて

1909年6月10日、ローザンヌ大学は、レオン・ワルラスの生誕75年と経済学者としての研究生活50年を記念し、式典をローラ・ド・パレー・ド・リュミーヌの講堂で催した。その折、シュンペーターはワルラスを訪ねている。当時、ワルラスはすでにローザンヌ大学を退き、ヴィルフレッド・パレートがその講座の後継者になっていた。1900年には二度目の妻とも死別し、ワルラスはその未婚の娘アリーヌと共に、なんの未練もなくレマン湖近くのクララン (Clarans) という村に引っ越していた。

ワルラス研究家の御崎加代子によれば、ワルラスは当時、そこで父オーギュストと自分の文献の整理をしながら、ノーベル平和賞の受賞を本気で考えていたらしい。事実、ワルラスは自らの社会経済学に基づき、土地国有化によって国家が地代を国庫収入に充てるようになれば、すべての税制度を廃止することができるようになり、税の廃止が自由貿易の絶対的条件であるという論文をノーベル平和賞委員会に送り、自らの受賞をアピールし続けたが、結局、賞を得ることはなかった、と²⁷⁾。

シュンペーターは、ワルラスに対して前年の1908月9日付で、ロンドンの住所から『本質と主要内容』を献本していた（その時期、彼はカイロに職を得ていたので、実際に住んでいたかどうか不明である。それとも、結婚したシーバー夫人が当時、ここに住んでいたのだろうか）。ところが、ワルラスに会ったとき、シュンペーターが26歳と余りにも若かったため、ワルラスから、「あなたのお父様の本、どうもありがとうございます」とお礼を述べられたという逸話が残っている²⁸⁾。そのとき、ワルラスはシュンペーターに対して、定常過程の理論が理論経済学の全てであって、そのため経済学者は歴史的な変化について何も語ることはできない、というような趣旨の

ことを述べたという。

このようにワルラスとシュンペーターのやり取りはしっくり行かず、ワルラスの言葉にシュンペーターはいたく不満を覚えたようである²⁹⁾。なぜならシュンペーターは、ワルラスの体系のうちには、外部環境に適応する経済主体があるだけであって、市場を攪乱する経済主体が存在しないと解釈したからに他ならない。すなわち、ワルラスの静態理論は完全競争(ワルラス自身の言葉では、絶対的な自由競争)を前提とする静態的過程には適用できるが、経済数量の規模が絶えず変化し、資本蓄積やイノベーションが生じる動態的過程の予測には無力だと考えたからである。この件については元々、ワルラスは自己のモデルから均衡でない状態での取引を慎重にも排除していたにもかかわらず、シュンペーターはそれを配慮していなかった。それゆえに、この彼の考えが後世に、静態理論と動態理論の不幸な結婚だと批判される羽目になる。

翌年、1910年1月15日の朝、ワルラスは生涯を閉じたのである。ワルラスは、晩年しばしば評価を受けたことがあったけれども、実際、彼の影響がこれまでにあったのは、その死後になってからのことだ。

2-6. 初めて教壇に立つ

ところで、この著『本質と主要内容』は前述したように、実は母校であるウィーン大学法学部への教授資格取得のために用意され論文であった。その後1909年2月15日、「抽象的な定理の統計学による論証」と題する試験講義にも無事パスし、彼は教授資格を取得した。ウィーン大学法学部では政治経済学の私講師として1909年夏学期から、「科学的社会学の成立とこれまでの達成」と「初心者のための政治経済学入門」の講義を担当したものの、計画していた1909年から10年にかけての冬学期は担当せず、同年の秋にチェルノヴィッツ大学の員外教授(准教授)として赴

任してしまった。このようにシュンペーターが母校のウィーン大学の教壇に立ったのは、ほんのわずかの期間でしかなかった³⁰⁾。

ここで「私講師」(Privatdozent)という制度について若干説明を加えておきたい。私講師というのは、大学で教える資格だけを与えられているにすぎず、その実態は無給で基金からの援助や学生の支払う聴講料を得るのみの立場の人である。

萩原能久は、エッセイ「昨日の世界——ウィーンという大学」(『三田評論』第992号、1997年6月)の中で、ウィーン大学で学んだことのあるフォン・ハイエクやシュテファン・ツヴァイクを引き合いに出しながら、次のように語っている。当時のウィーン大学における学問状況の特性は、誰もがその専門分野に自己限定することなく、さまざまな講義を自由に聞くことができる多様性にあった。ことに個別的な学問の縄張り争いにとらわれず、学際的な多様性を実現させたのは、ある意味で、大学という制度の外側にあった文化である。それは一つに、『昨日の世界』の著者ツヴァイクも強調してやまない「カフェ文化」、つまり一杯の安価なコーヒーと引き換えに何時間でも議論し、無数の新聞や雑誌を読み、誰にでも近づくことのできる一種の民主的クラブの存在であった、と³¹⁾。

授業終了後、大学内のカフェで、あるいはすぐ向かいにあるカフェ・ラントマンなどで繰り広げられる教授と学生の間答が、更なる学問形成の場であったようだ。そこにたむろしていたのは学問・文化の担い手だけではなく、亡命中のスターリンやトロツキー、後にシオニズム運動の旗手となるテオドール・ヘルツル、そして若き日のアドルフ・ヒトラーもいたというのだから、驚きである³²⁾。

こと学問の世界に限っても、前世紀末から今世紀初頭にかけてのウィーンは、お世辞抜きにすばらしいところであった。例えば、論理実証主義の哲学とヒルベルトの形式プログ

ラム、それにオーストリア学派の経済学を研究対象としたウィーン学団、それに先立つエルントス・マッハ、ルートヴィヒ・ボルツマンら物理学畑の学者たちが開拓した科学哲学、それにかかわるカール・ポパーや言語哲学・分析哲学の創始者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、純粋法学の創唱者ハンス・ケルゼン、政治学者エリック・フェーゲリン、社会学者マックス・ウェーバー、社会学者アルフレート・シュッツ、そして忘れてはならない精神分析の巨匠フロイトといった知的巨人たちがひしめき合っていたからだ。時代的経過はあるものの、ウィーンに実際に身を置き、萩原自身が体験を通して語っているだけに説得力がある³³⁾。

オーストリア学派の中においても、シュンペーターのような均衡論から出発せず、フォン・ミーゼスとかフォン・ハイエクとかのように過程としての市場を対象にして、取引理論を基本概念に据え、時間の流れの中にその存在を認めるような考え方を打ち出した者もいる。シュンペーターの理論よりもこちらの方を重要視する経済学者も多い。いずれにしても、オーストリア学派は今後も脈々と学門の世界で生き続けて行くことになるだろう。

いま一つ取り上げておかなければならないことがある。それは、1928年から数学コロキウム（あるいはウィーン・コロキウムと呼ばれた一種の科学者会議）で、オーストリア学派の創設者カール・メンガー（Carl Menger）の息子でウィーン学団の一員であったカール・メンガー（Karl Menger, 1902-1985年、純粋数学者）が友人のK.シュレジンガー（1889-1938年、銀行家兼経済学者）を中心に据え、フォン・ノイマン、O.モルゲンシュテルン、A.ワルト（1902-1950年、純粋数学者、ワルラス-カッセル一般均衡システムを開発）などに呼びかけ、ローザンヌ学派の研究を開始させたことである。特記しなければならないのは、オーストリア学派に

欠けていた一般均衡体系を問題にし、その均衡解の存在証明を研究したことである。

これが、その後のサミュエルソン、アロー、ドブリュー、コールズ委員会に多大な影響を与えることになる。1932年には、シュンペーターはすでにハーバード大学の教授に就任していたが、この数学コロキウムと彼の関係については残念ながら不明である。シュンペーターはその著『景気循環論』や『経済分析の歴史』の中で、そのことの一部を紹介しているにすぎない³⁴⁾。

なぜ、この時期のウィーンにこのような個性的かつ多様な学問・芸術が開いたのだろうか。その素朴な問いに対して、マルチカルチャリズム（多文化主義）やブルーリズム（多元主義）と呼ばれるこの都市の有する特性があげることができるかもしれない。

ところで、当時のオーストリア=ハンガリー帝国の中で、経済学の講座をもつ大学は少なく、法学部で教えていた程度である。彼の母校ウィーン大学ですら、当時、経済学の教授のポストは二つしかなかったといわれている（後に三つになる）。そのためシュンペーターは、首都ウィーンを遠く離れたユダヤ文化の中心都市にあるチェルノヴィッツ大学（帝国の総合大学の一つで1875年創立）の員外教授（准教授）として赴くことになった。

チェルノヴィッツ（現在はウクライナのチェルニフツィ）は、帝国の最も東に位置するブコヴィナの州都であった。チェルノヴィッツにおける二年間は、多民族、多言語が同居する東欧の辺境都市で、シュンペーターにとってはさぞ退屈な生活であったと思われるが、さにあらず、この大学は多くの若いオーストリアの学者たちにとっての学究生活の出発点となったところだけあって、決して学問的刺激に欠けていたわけではない。

なぜなら、ここチェルノヴィッツで彼は、「婦責問題に関する所見」（1909年）、「社会

の価値の概念について」(1909年)、「経済恐慌の本質について」(1910年)、「マリ・エスプリ・レオン・ワルラス」(1910年)、「連合国家における新しい経済理論」(1910年)、「法と経済における基礎的利益」(1911年)の計6本の論文を発表したり、また、1911年11月21日、地元「社会科学学術協会」から依頼された講演があったり、これは後に加筆修正されチェルノヴィッツ社会学叢書の第7巻『社会科学の過去と未来』(1915年)の中に取められているからだ。

この本『社会科学の過去と未来』は、シュンペーターの社会科学方法論の基礎となる文献だけあって各方面から注目されている。例えば、社会思想家でもあり同書の翻訳者でもある谷嶋喬四郎をして、この書は社会科学を哲学者の眼でなく、経済学者の眼で見た問題提起の書であるとして、これまでとは違った意味での感動を覚えるものだと言わしめたほど、衝撃的な書である³⁵⁾。また、塩野谷は、「これは、1920年代および1930年代のシェラーやマンハイムの業績に先立つ科学社会学の試みであり、とくに科学者集団としての学派を論じたこと、またそれを科学の発展という歴史的観点から論じたこと」³⁶⁾を高く評価している。

シュンペーターは、もうこの時期に社会科学の思想史という大きな広がりをもつ問題に対して、経済社会学の立場から独創的な「ビジョン」と透徹した「直感力」、その上に、それらを総合化していく思考の柔軟性と長期的分析に伴うバランス感覚をもっていたことになる。

この頃のシュンペーターの数少ない武勇伝の一つに、学生の図書への借り出しをめぐる、ある図書館員と決闘をした有名な逸話が残っている。

2-7. グラーツ大学へ転勤

そうこうしているうちに、シュンペーター

は1911年12月7日、チェルノヴィッツを去り、オーストリア第2の都市グラーツに移り、地元グラーツ大学(帝国の総合大学の一つで1585年創立)の教壇に立つことになる。グラーツ大学への招聘に際しては、歴史学派のリヒャルト・ヒルデブラント(ブルーノ・ヒルデブラントの息子、この件でシュンペーターとの間で一生しこりを残す羽目になる)の反対があったにもかかわらず、1911年10日、彼は正教授に任命される。この裏で、恩師ベーム・バヴェルク教授の皇帝への働きかけがあったといわれている。

ところで、日本で最初にシュンペーターを紹介したのは文豪、森鷗外である。森は、「Graz大学で理財学教授 Schumpeter が苛酷なので学生が反抗した」³⁷⁾と当時のエピソードを『棕鳥通信』(第44回、1912年10月27日)で伝えている。この事件を機会に自らを反省し、学生からの信頼を取り戻したようだ。熱血漢なシュンペーターの一面を物語る事件である。

グラーツ時代に著したのは、後に不朽の名著といわれる『経済発展の理論』(1912年)である。同書は、処女作『本質と主要内容』で示した静態理論を現実に対応させるため、動態理論を展開し、非ワルラス的な世界、つまり彼が動態的問題群と呼んだ狭い範囲について、自己の考えを展開したものである。

ついでながら、シュンペーターの発展理論と古典派の成長理論を比較すれば、次のように異なることがわかる。彼の発展に関する理論は、経済過程の内部から自発的に生まれ、しかも非連続的な変化を重視しているのに比べ、古典派経済学の成長理論は人口や貯蓄の増加などによって誘発された連続的な変化を重視し、また刺激への反応においても古典派は受動的、一方的、短期的であるのに対して、彼のそれは能動的、創造的、長期的に反応するものである。その後、新古典派に至っても、競争均衡における資源配分に興味が続けられた

ため、均衡状態における経済が次にどのような変化するのかということには、関心を払われなかった。これをみてもわかるとおり、シュンペーターは善きにつけ悪きにつけ単なる理論経済学者ではなかったのである。

1926年、シュンペーターは自著『経済発展の理論』に対する批判から改訂を決意し、第2版を出版するが、その内容は頑固なまでに初版と全く同じであった。なぜそうなったのだろうか。結局、同書に対する恩師ヴィーザー教授などの批判に応えるために、第1版の最終の第7章「国民経済の全貌」を省き、サブタイトル「企業家利潤・資本・信用・利子および景気の回復に関する一研究」を付すにとどめ、自らの考えを貫いた。

3. 第1次大戦とその後

3-1. 転機を迎えたシュンペーター

1913年から14年にかけての冬学期、シュンペーターはオーストリアの交換教授として、米国コロンビア大学に赴任する。ここで、彼は先のチェルノヴィッツ大学で行なった講義「国家と社会」を発展させた形で集中講義を行ない、1914年3月にコロンビア大学からこれまでの業績に対して名誉人文学博士の称号を授けられる。その間、彼は同大学のJ. M. クラークやW. C. ミッチェル、エール大学のI. フィッシャー、ハーバード大学のF. W. タウシッグなどをはじめ、米国を代表する経済学者らと知的交流を深める。

第1次世界大戦の勃発する直前の1914年12月に帰国するが、彼は学部長の働きかけやグラーツ大学で唯一人の経済学教授だという理由で、兵役を免除される。その分、人一倍がんばり、M. ウェーバーの編集による叢書『社会経済学綱要』の第1巻の学説史部門の執筆を任せられ、シュンペーターは見事にその任を果たす。

そうこうしている内に、シュンペーターに

とっては大きな転機を迎えることになる出来事が起こる。第1次世界大戦中の1918年の夏、ドイツ軍とオーストリア＝ハンガリー軍が西部戦線で敗北を喫したことから、形勢が一変してしまう。シュンペーターは第1次大戦後、非マルキシストだったにもかかわらず、1919年1月11日にグラーツを去りベルリンに入り、K. カウツキーを委員長とするドイツ社会化委員会にR. ヒルファーディング、E. レーデラーなどと共に加わる。当時、ある若い経済学者に「なぜ国有化を目指す社会化委員会へ参加したのか」と問われて、シュンペーターは即座に「もし誰かが自殺したいというならば、医者がいの方がよいからだ」と答えたといわれている³⁸⁾。旧帝国解体後のオーストリアは憲政上はじめて、カール・レンナーを首班として社会主義政権（社会民主党とキリスト教社会党による第1次連合政府）を誕生させるきっかけになる。

1919年3月、かつての学友で外務大臣であったバウアー（最初はV. アドラーであったが、彼の急死により後任となった）の推薦もあって財務大臣（当時の呼び方は財務国家書記）に就任する。だが、シュンペーターにとって不幸だったのは、レンナー首相が党内で急速に指導的地位を確立したマルキシストのバウアーと彼を支持する左派の意見対立を克服できなかった最中であつたことである。しかも、シュンペーターのこのポストは元来、政治的基盤を持たない彼にとって、微妙な立場であつたに違いない。このとき、シュンペーターは財政赤字とインフレを抑えるために財産税を課し、加えて国債の発行や外国からの借款によって切り抜けようとして「財政計画」を提案したにもかかわらず、社会主義革命の必要性を信奉するバウアーとの路線の違いや、社会化問題をめぐって、政治スキャンダル化したアルピン・モンタン社（オーストリアで最大の鉱山会社）の事件に巻き込まれ、約7ヵ月で第2次レンナー内閣は総辞職

する羽目になる。

この件について、安井琢磨はシュンペーターが内閣の蔵相の地位をわずか一年足らずで辞任せざるを得なかった事情を、シュンペーター研究者に究明して欲しいと要望している。「一般に伝えられるところでは、ウィーンの銀行家コーラの介入でオーストラリア最大の鉄鋼企業アルピーネ・モンターンの株式がイタリアの金融機関に売却されたとき、大蔵大臣のシュムペーターが閣議に諮らずにこれを認可したことが辞任の理由だったとされている。レンナー内閣の外相オットー・パウアーも、その『オーストリア革命』(1927年)の中でこのことを述べてシュムペーターを非難している。しかしこの点に関しては、シュムペーター側の言い分とともに、当時社会民主党(レンナー内閣は社会民主党とキリスト教社会党との連立内閣であった)が抱いていた基幹産業の『社会化』の計画に対してシュンペーターがどのような立場を取っていたかを明らかにする必要がある。彼の短い政治家としての活動を、従来のシュムペーター研究は成功しなかったエピソードとして簡単に片づけることが多い。しかしレンナー内閣への参加を通して、シュムペーターが敗戦国オーストリアをいかなる形で再建することを望んでいたかの意図を具体的に探ることが望ましい」³⁹⁾。

確かに、シュンペーターの財務大臣辞任の件は、闇に包まれた謎の部分もあるが、最近、ロバート・L. アレンの聞き込み調査や、トマス・K. マクロウ、ハイツ・D. クルツ、坪井賢一、米川紀生などによる史実に基づく検討などにより、いずれその辺の事情は明らかになってくるだろう⁴⁰⁾。結果としては、オーストラリアの戦後経済危機は、シュンペーターの主張した通り1919年の連合国とのサンジェルマン条約による戦時賠償金の減額措置と、1922年の国際連盟の管理下での国際借款で救われることになる。

1921年7月、シュンペーターはウィーン のビーダーマン銀行(M. L. Biedermann & Co. Bankaktiengesellschaft) 頭取に就任する。最初のうちは順調だったが、1924年にオーストラリアを襲った経済危機によって——とりわけ、自らの投資に失敗したりテレジアヌム出身の友人にだまされたりして——間もなく銀行は膨大な不良債権で経営危機に追い込まれる。1924年9月、自己資本不足に陥ったビーダーマン銀行はイングランド銀行の子会社であるアングロ・オーストリア銀行から資本注入と引き換えに、シュンペーターは頭取職を事実上解任されてしまう。

H. D. クルツによれば、投資がうまくいっていたときは、シュンペーターは自ら進んで何人もの売春婦をかわるがわる伴って歩いていたという⁴¹⁾。しかし、シュンペーターは数週間のうちに一切の蓄財を失ったばかりでなく、多額の負債(正確な数字はわからないが、銀行に対しての負債は今日の貨幣価値に換算して約5,000万円、その他、未払いの税金、友人知人からの恩借、別れた妻シーバーへの慰謝料の支払いなど)をも背負い込んでしまう⁴²⁾。こうしてシュンペーターは、失意のうちに政財界の現場を去ることになるが、以後、多額の借金返済のため、十年以上も苦しめられる破目になることなど、誰が予想できただろうか。断っておくが、当時のオーストリアにおいては、学者と政治家の二足のわらじを履くことは、シュンペーターの恩師をみればわかるとおり、決してめずらしいことではなかった。

こうした人生の試練の中にあっても、彼は『租税国家の危機』(1918年)と「帝国主義の社会学」(*Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 誌, 第46号, 1919年)を発表する。前者の「租税国家」という概念は産業資本主義の確立とともに出現したものであり、国家が財政収入の大部分を租税収入に依存している状態をいう。この用語はルドルフ・ゴルトシャイトなどによって提唱された

ものだが、これを一般化させたのは、ほかならぬシュンペーターによるところが大である。

とりわけ、第1次大戦中に執筆された同書『租税国家の危機』において、シュンペーターは、「第1次世界大戦は果たして、租税国家の危機をもたらし、租税国家の機能停止を不可避とするものだろうか」と自問し、これに対する答えは「否」であった。その原因は資本主義経済とのかかわりのもっと深いところに求められるべきものである。社会主義者でないシュンペーターが資本主義の没落や、これに代わるべき社会主義の出現を予想してただけに、大いに注目に価する見解だといわれている⁴³⁾。

神野直彦はこの間の事情を次のように説明している。「ゴルトシャイトは、祖国オーストリアの財政破綻を憂い、1917年に『国家社会主義か国家資本主義か』を世に問うたのである。その翌年、オーストリアの大蔵大臣を務めていたシュンペーターが、ゴルトシャイトの提唱する財政社会学を受け継ぎ、『租税国家の危機』……を発表する。シュンペーターは市場社会とともに成立する近代国家が、市場経済から調達する貨幣に依存するしかない『経済的寄生 (economic parasite)』としての租税国家であることを明らかにしたうえで、ワグナーが定式化した『経済膨張の法則』と『経済的寄生』との対立関係を分析する。

シュンペーターによると、市場経済が高度化すれば、社会的共感の領域も拡大するため、社会サービスの供給水準を引き上げざるをえなくなり、財政経費は膨張する。とはいえ、租税国家は『経済的寄生』という存在であるため、租税で市場経済を萎縮させてしまうわけにはいかない。シュンペーターはこうしたディレンマのために、『租税国家の危機』が生起せざるをえないと主張したのである⁴⁴⁾と。

何もシュンペーターの時代だけの問題では

なさそうだ。わが国でも「財政の破綻」が問題になっている。そもそも租税の本質的機能は、公共サービスの費用調達機能に重点があったはずなのが、それが所得の再分配機能や景気の調整機能にまで拡大し、これが政治の力によって節度なく民間にばらまかれれば、際限なく国家の赤字は続くことになる。

一方、後者の「帝国主義の社会学」は、第1次大戦後のものだが、その二年前に出版されたレーニンの『帝国主義論』（ロシア語版、1917年）を読んでいかどうか定かでない。このシュンペーターの論文は、古代から近代までの歴史に現われた帝国主義の実態を基に、その国の資本主義そのものの内在的論理と結びつけずに、国民の心理的性向や社会構造と結びつけ、ホブソンやネオ・マルキシストですら見落としていた国家の際限なき拡張を強行しようとする無目的な行為について言及したものである。

シュンペーターの評価について、例えば、伊東光晴によると、シュンペーターの帝国主義論は、資本主義の段階を区別することなく、プロイセン＝ドイツという現実への批判であると同時に、それがオーストリアを巻き込み、第1次世界大戦へと進む現実を前にして展開された帝国主義への批判であることを忘れてはならない⁴⁵⁾。そういわれると、確かにシュンペーターは「標語としての帝国主義」と「帝国主義の実践」を区別しているに過ぎない。その結果、シュンペーターの帝国主義論は、あまりにもドイツ帝国主義を一般化しすぎ、イギリス帝国主義を執拗なまでに無視することになる。また、都留重人によると、シュンペーター帝国主義論の最大の弱点は、「資本主義の独占的な側面と帝国主義とを結びつけることに成功しながら、その独占的な側面を『純粹の資本主義』とは別個のものである⁴⁶⁾と断定した点に他ならない。

帝国主義に関する二人の論者の見解を紹介してみたが、いずれにしても、帝国主義とい

う用語はもはやその歴史的インプリケーションを失い、論者によってはその概念規定が異なり、しかも一般的に相手を批判するための強力なインパクトをもつものとなってしまったため、シュンペーターの帝国主義を正当に評価するには、従来の固定概念にとらわれない帝国主義の構造とその歴史的分析の視点が求められる⁴⁷⁾。

このようにシュンペーターの足跡を振り返ってみると、彼にとっての30歳代は、祖国オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊と合わせて、必ずしも幸運な時代ではなかった。というのも、彼がせつなくなつた大蔵大臣を辞任せざるをえず、その後、頭取に就任したビーダーマン銀行が倒産し、そして最初の妻リカード＝シーバーとの間に法律上の正式離婚が成立した時期でもあったからである。こうした悲しみに暮れていたとき、東京帝国大学とボン大学からの就任要請があつた。

3-2. ボン大学へ就任

東京帝国大学では、すでに2カ年で満期となるE.レーデラー(東畑によれば、シュンペーターの一番の親友)の後任として、シュンペーターを客員教授として招請することを決め、その後の交渉を欧州留学中の河合榮次郎助教授に委ねる⁴⁸⁾。しかし、時を同じくしてボン大学が、カール・ハインリッヒ・ディーツェル教授の後任として、シュンペーターを正教授として迎える旨を通知したため、結局ボン大学へ赴くこととなる。

このボン大学に推挙したのは、A.C.シュピートホフ教授であつたが、これはシュンペーターの旧友の一人、グスタフ・ストルパーの後押しがあつたからである。シュピートホフはベルリン大学でヴァーグナ教授の下で学び、シュモラー教授の助手を経て、1918年からボン大学教授として就任していた。伝えられるところによれば、東京帝国大学は短期間であつたのに対し、ボン大学は7カ年間

の契約を提示したことが決め手になつた。

1925年10月、彼は正式にボン大学正教授に就任する。そこでは初心者向けに経済学史、高学年向けに社会学、財政学を講義し、年度によっては貨幣と本位貨幣論、数理経済学を講義したり、ゼミナールでは社会階級論を担当したりし、本格的に研究と教育を再開することとなる⁴⁹⁾。東京帝国大学へは結局、シュンペーターのウィーン大学での一年後輩に当たるA.アモンが受諾し来日、1926年から29年まで就任し、学生たちにワルラスの一般均衡理論などを講義し、多大なる影響を与えることになる。

ボンという街は楽聖ベートーベンの生地としてつとに有名なところである。ボン大学は、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世によって1818年に創立され、日本から1887年に新渡戸稲造が留学していたことでも知られている。前身のアカデミーはケルン選帝侯により1777年に創立されてはいるものの、ドイツの中では比較的歴史の浅い大学だが、その名にフリードリヒ・ヴィルヘルム王の名を冠していることから、プロイセンはこの大学を重視して、その充実につとめたため、やがてボン大学はドイツ有数の大学へと発展する。

そのことは、マルクス、ハイネ、ニーチェなど、19世紀のドイツにおける一流の人物が学籍簿に名を残していることからもうかがえる。もちろん、シュンペーターはドイツの市民権を取得するが、同時にこのことは彼にとって祖国を捨てるはじまりでもあつた。

シュンペーターの教え子であるE.シュナイダーは、シュンペーターが就任したお陰で、ボン大学は「全世界の経済学者のメッカ」⁵⁰⁾となつた、と丁寧な筆致でその経緯を語っている。シュナイダーの著書を読む限り、まんざら大げさな表現でもなさそうだ。ところで、シュンペーターがボン大学へ移つた直後、1925年11月5日にアンナ・ジョゼフィナ・

ライジナー（Anna Josefina Reisinger）と再婚し、その翌年、男の子が生まれたが、出産後すぐに産褥熱で母子ともに相次いで失った。

こうした悲しみの淵に沈んでいた状況の中で、彼は手始めに前述した『経済発展の理論』の大改訂に着手し、次に「社会階級論」（1927年）に取り掛かる。前者の著書については別の機会に述べるとして、後者の論文は、マルクスの階級論を意識して書いたというだけでなく、社会階級を単に資本主義とだけかかわらせて論じることの限界を指摘し、さらに時代をさかのぼると共に、一族や一家の階級の移動にも広く目を配り、階級現象の究極的根源が個々人の指導力との関係における「適正の差異（differences in aptitude）」に基づくことを論証したものである。したがって、これはマルクスのように資本主義が労資の対立からなるという考え方を否定し、企業家のイノベーションの遂行によって経済発展のスキームを説明するための予備的論文と位置づけることができる。

1927年から28年にかけて、シュンペーターはハーバード大学客員教授として米国に滞在することになるが、その前後にボン大学でシュンペーターの薫陶を受けた教え子の数はきわめて多い。例えば、日本から留学した中山や東畑をはじめ、E. シュナイダー、W. ストルパー、H. フォン・シュタッケルベルク、H. W. シンガー、そして、E. F. シューマッハー（後に『スモール・イズ・ビューティフル』の著者として日本でも有名になる）などが、そうである。

戦前のドイツでは、前述したとおり、歴史学派の経済学が主流であったが、シュンペーターはワルラス、マーシャル、ヴィクセル、そしてオーストリア学派の理論を駆使し、ドイツの経済学界に新風を吹き込もうとした意気込みが感じられる。また、彼の講義はよく脱線し、ゲーテからゴシック建築、さらにピ

カソにまで及んだといい、こうした点に教師としてのシュンペーターの趣味と教養の深さを垣間見る思いがする。

3-3. シュンペーター来日

都留によれば、シュンペーターは「日本の文化を非常に愛しておられ、『源氏物語』をアーサー・ウェーリの訳で読み、Lady Murasakiのような人と一晩ゆっくりかたりあかしてみたい⁵¹⁾と真顔で話していた。このことから察しられるように、シュンペーターは日本ひいきであったといわれている。それは、1931年1月25日、米国で行なわれた計量経済学会の創設にかかわる会合からの帰途、来日した一件からもうかがえる。

約三週間と決して長い滞在ではなかったが、東京滞在中の1月28日には東京商科大学（現・一橋大学）で講演し、そのついでに図書館を訪れ、オーストリア学派の祖師として知られているカール・メンガーが蒐集したもののうち、文学・自然科学を除いた1万8千余冊からなる世界的コレクション「メンガー文庫」を閲覧した際には、驚嘆した様相であった。翌29日には日本工業倶楽部、30日には東京帝国大学で講演をし、その後、日光、箱根にも足を伸ばしている。2月6日、7日、10日にわたって、神戸商業大学（現・神戸大学経営学部）で三回の講演し、2月13日まで滞在した。その間、京都を訪れ、高田保馬、柴田敬、小島昌太郎らと会ったり、田中金司や柴田の案内で奈良見学に出かけたりした。2月12日には大阪入りし、ラジオ大阪で講演し、翌日離日した。こうした足跡は、戦後のわが国の経済学徒に大いに影響を与えることになる⁵²⁾。

一旦ボンに戻ったシュンペーターは、これまで勤めていたボン大学との契約期限が迫ったので、次の就職先を探さなければならなかった。しかし、その後に希望したW. ゾンバルトの引退後のベルリン大学への就任は彼

自身の抱えた多額の負債などが原因でままたらなかつたため、研究環境が比較的よく整っていたハーバード大学行きを決めた。1931年9月21日、イギリスがポンドと金の兌換を停止したため、金本位制を放棄する国が続出し、国際的な信用秩序としての金本位制は事実上停止し、国際経済は混乱していたときである。

ところで、かねてから「ウィーンで最高の馬術家、ヨーロッパで最も愛される人、世界で最高の経済学者になりたい」というのがシュンペーターの願いであったが、その前者の二つは叶えられないまま、最後の「世界で最高の経済学者になること」を新たに決意し渡米する。

4. ハーバード大学在職時代

4-1. ハーバード大学、シュンペーターを迎え入れる

1932年9月、大不況が深刻化する中、ハーバード大学はシュンペーターを迎え入れた。シュンペーター49歳の秋である。

そこでは、多くの人びとがシュンペーターとの知的交流を心から待ち望んでいた。そのような状況の下で、世界中から集う優秀な学生たちを指導したり、ナチのためにヨーロッパを追われた進歩的な学者の世話をしたりすることで、彼自身、社会に対するこれまでの恩返しを果たしているかのようによく働いた。

一部の論者によって、シュンペーターはナチに追われて米国に渡ったとされているが、そのままドイツに留まれば、そうなったかもしれない。周知のとおり、ヒトラーは1933年1月30日、当時のバウル・フォン・リンデンプルク大統領によって首相に任命され、翌年の8月2日、リンデンプルク大統領の死去に伴って大統領と首相を統合し、自ら総統に就任する。迫り来るファシズムの足音を敏感に察知していたかどうかは知らないが、当

時はまだそれほどひどい状況ではなく、逆にシュンペーターはファシストで親ナチだと時々非難されていたくらいである。しかし、都留によれば、シュンペーターにはユダヤの血が4分の1ほど混じっていたというのだから、米国に渡ったことは結果的に悪いことではなかったはずだ⁵³⁾。シュンペーターにユダヤの血が混じっていたからといってそれほど驚くに値しない。もともと彼の生まれたモラヴィア地方は南方のラテン系の文化と北方のゲルマン系の文化との交流の要衝で、民族としての定義はあいまいなままのところである。ハーバード大学での彼の学生に対する指導方針は、自らの理論を押し付けることなく、「理論経済学における課題は、経済動学と厚生経済学だ」と言い続け、計量経済学や数理経済学、経済統計学のよき理解者であった。このような教育環境の下で、実に多くの優秀な教え子を輩出している。

ここで具体的な名前をあげれば、サミュエルソン(1970年ノーベル経済学賞受賞者)をはじめとして、J.K.ガルブレイス、R.マズグレイブ、R.トリフィン、L.A.メッツラー、アラン・スウィージー、ポール・スウィージー、A.バークソン、R.M.グッドウィン、E.D.ドーマー、J.トービン(1981年ノーベル経済学賞受賞者)、J.S.ベイン、R.M.ソロー(1987年ノーベル経済学賞受賞者)、オスカー・ランゲ、A.ラーナー、N.カルドア、P.バラン、エリック・ロール、F.マッハルプ、N.ジョージェスク＝レーゲン、O.モルゲンシュテルン、J.マルシャック、そしてケンブリッジ大学でケインズの教えを受けてきたロバート・E.ブライス(トロント大学、ケンブリッジ大学、ハーバード大学大学院で学び、その後、カナダ財務省副長官、国際通貨基金理事などを歴任)などがあり、経済学をかじったことがある人なら、皆なじみの深い名前ばかりである。最高学府として希にみる環境がハーバード大学経済学

部に醸成されていたことがうかがえる。

中でもポール・スウィージーはシュンペーターを次のように評する。「私にとって——シュンペーターの下で学んだ大部分の人たちも同じだと思うが——彼から受けた学問的な恩恵を口で言い表すのは容易なことではない。彼は、自分のまわりに弟子のグループを作るなどということは全然しようとしなかったにもかかわらず、私は、彼ほど教師として学生に個人的かつ細心の関心を寄せた人を知らない」⁵⁴⁾。このスウィージーの言葉から、教師としてのシュンペーターに全幅の信頼を寄せていたことが察せられる。

4-2. ハーバード大学経済学部の黄金時代

都留重人の言葉を借りれば、シュンペーターは「ハーバード経済学部の黄金時代」⁵⁵⁾の立役者の一人であった。1930年代のハーバード大学経済学部は、シュンペーターをはじめ、A. H. ハンセン、E. H. チェンバリン、S. E. ハリス、E. S. メイソンなどの教授陣に、ヨーロッパから渡米してきたW. レオンティエフ、G. ハーベラーが加わり、そうそうたる顔ぶれを擁していた。

1935年9月1日付けで、シュンペーターはハーバード大学において名誉ある冠教授(George F. Baker Professor of Economics)に就任し、これまで温めていた構想の執筆に本格的に取り掛かる。これが後に『景気循環論』(1939年)として結実するものだが、同書は、統計資料が今のように整備されてないこの時期に悪戦苦闘を強いられながら、ほとんど独力で書き上げる羽目になる。この点、1920年に全米経済研究所(NBER)を組織し、以後25年にわたりその助力を仰いだW. C. ミッチェルのような一連の景気循環の研究などとは比べものにならないほど、自らの時間と労力を費やすが、しかし、同書の刊行は決してタイミングがよくはなかった。なぜなら、ケインズの『雇用・利子および貨幣

の一般理論』(1936年、以下『一般理論』)が既に出版されていたため、人びとは次から次へとケインズ経済学のユーフォリア(陶酔的熱病)に侵されつつあったからである。

サミュエルソンはこのような状況をつぶさにながめながら、次のように例えている。この新しいケインズの『一般理論』は、「あたかも南海の孤立した島民を突如として襲い、これをほとんど全滅させた疫病のごとき思いがけない猛威でもって、35歳以下の経済学者のほとんどをとりこにした。ただし、50歳以上の経済学者においては、その病気に対して十分な免疫をもっていたことがわかった。時がたつにつれ、その中間にあたる経済学者のほとんども、そうとは知らずに、あるいはそうとは認めようとはせずにいる間に、その熱病に侵されて行った」⁵⁶⁾と。

しかし、1935から36年度のハーバード大学大学院では、実にシュンペーターが「景気循環論」と題するセミナーを肅々と行なっていた。そのセミナーでは、ケンブリッジ大学でケインズから直接学んだロバート・ブライスがことごとくシュンペーター理論に対し、ケインズ理論をぶつける形で反論をしたので、シュンペーターから「君はアラー(ケインズ)の啓示を伝える預言者だね」と揶揄されていた。当時、アルヴィン・ハンセンが、ケインズ理論の教育に指導的な役割を果たした。彼は、もともと反ケインズ派でミネソタ大学から新設リッター・スクール(行政学院)の教授として赴任したばかりであったにもかかわらず、ケインズ派に転向した。その後、教授のシーモア・ハリス、大学院生であったサミュエルソンもケインズ理論を巡る議論や会合の仲間に加わった。しかし、都留によれば、ハーバードにおいては『一般理論』といち早く取り組んでいたため、「衝撃」として受け取られず、むしろケインズという人物に対する関心を一挙に高めさせる結果になった、と感想を寄せている⁵⁷⁾。

実は、このような都留の好意的な感想とは別に、1975年10月、ウェスタン・オンタリオ大学での討論会で、D.パティンキンは「シュンペーターがその『経済分析の歴史』の中でケインズについて書いたとき、彼がさまざまな経済学者のなした貢献の評価をなすのに公平な歴史家であったとは考えられない。……景気循環論の分野において、疑いもなく自分自身をケインズの競争相手だと考えていたケインズの同時代人だ」⁵⁸⁾と述べた。サミュエルソンはそれに対して相槌をうちながら、「シュンペーターはケインズにやきもちを焼いており、彼の最良の学生たちがこの男の後について離れていってしまうのを、とても嫉妬していた」⁵⁹⁾と述べ、その後、オタワ大学のベン・ヒギンスが話に加わり、「シュンペーターがケインズをとて嫉妬していたことは、その通りだと思う。私は1938年の秋、ハーバードでシュンペーターのセミナーに出席していたので、それをとてもはっきりと記憶している」⁶⁰⁾と語る。

もう一人、ハーバードでシュンペーターの講義を受けたことがあるロバート・L.ハイルブローナーは、「経済生活に関する自分の見解が、ケインズのものとは相容れないということを最初に強調したのはシュンペーター自身だったようである。この二人は、多くの社会的見解、とりわけ教養あるブルジョア生活への賞賛や、資本主義の一般的価値への信頼を共有していたが、しかし未来に関しては正反対の見解をもって登場した。既に見てきたように、ケインズにとって資本主義は、本質的にスタグネーションの可能性によって脅かされており、われわれの孫たちにとっての楽観的な見通しも、実際には政府の適切な手助け次第だった。一方、シュンペーターにとっての資本主義は、本質的にダイナミックで、成長によって導かれるものだった。彼は政府支出を、不況に陥った際に社会的な困窮を和らげるのに用いるべきだとは認めていた

が、恒常的な補助エンジンとして必要だとは考えなかった」⁶¹⁾と述懐する。

そうこうしているうちに、1937年8月16日、ハーバード大学ラドクリフ研究所で極東の経済発展やイギリスの海外貿易に関する研究をしていた女流経済学者エリザベス・ブーディ(Elizabeth Boody)と縁あって結婚する。ニュー・イングランド出身の彼女にとっても、再婚になる。ただし、この時点ではまだ、シュンペーター自身は、米国の市民権を取得しておらず、彼が米国人になるのは1939年まで待たねばならない。

ケインズの『一般理論』に遅れること三年、1939年にシュンペーターは満を持して『景気循環論』を公刊する。この『景気循環論』は、マルクスの『資本論』や、フォン・ノイマンとモルゲンシュテルンの『ゲームの理論と経済行動』と並んで、いまだに通読した人の数は限られたものでしかなく、「読まれざる古典」と皮肉られる始末。その上、「はしがき」に書かれている「私は、何の政策も勧告せず、何の計画も提案しないので、それだけしか気にかけていない読者にとっては、本書を手放すべきだ」⁶²⁾というシュンペーターのメッセージが、いっそう読者を遠ざける結果になる。その点、当時起こっている大不況に対する政策提言を試みたケインズの『一般理論』と対照的であった。

『景気循環論』というタイトルの書は、実はその副題「資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析」にこそ、シュンペーターの表現しようとした内容があることはあまねく知られているところだ。この書は、『経済発展の理論』において示された資本主義の発展と変動のモデルを論証しようとしたものであると同時に、資本主義体制の歴史と進化の図式を示そうとしたものである。

しかし、同書の執筆は、彼にとって本当に悪戦苦闘の連続であったようだ。なぜなら、シュンペーターはあまりにも野心的な課題に、

あまりにも乏しい道具でもってドン・キホーテのごとく突進せざるを得なかったからである。そもそも、資本主義の動態的過程を通常言語で論理的に展開するのは、絶対不可能ではないにしても、必然的に数学的な展開に頼らざるを得ない。同書が世に出た1930年代は、ちょうど自律的周期変動という概念を、微分方程式ないし差分方程式の解に現われる共役複素数に結びつけた議論が、経済学上で現われた時期でもあった。

このような経済学の状況の中で、前掲の『景気循環論』に対する評価は、いま一つといったところだったが、経済社会学的観点から資本主義のダイナミズムを分析した『資本主義・社会主義・民主主義』（1942年）は、テーマの設定が時宜を得たこともあって、世界15カ国語に翻訳され、今なお増刷を重ねている。

彼はハーバード在職中に、このほかにも多くの著作を残している。例えば、数学や統計学は得意ではなかったが、計量経済学の意義について語った論文「計量経済学の常識」が *Econometric* 誌（創刊号、1933年1月）の表紙を飾ったり、『経済再建』（1934年）と題するコロンビア大学委員会（委員長はコロンビア大学学長のN.M.バトラー）の報告書に論文「価格システムの本質と必要性」を発表したり、ルーズヴェルト政権のニューディール政策に批判的な立場から書かれた論文「不況」を、ハーバードの七賢人（D.V.ブラウン、シュンペーター、レオンティエフ、E.H.チェンバリン、E.S.メイソン、O.H.テイラー、S.E.ハリス）と呼ばれる人びとと共に、『復興計画の経済学』（1934年）に収めたりしている。また、シュンペーター自身の唯一の教科書といわれている『経済学者と統計学者のための基礎数学』（1946年）を同僚のウィリアム・L.クラムと一緒に書いたり、ケインズの追悼論文「ジョン・メイナード・ケインズ—1883-1946年」を

American Economic Review 誌（1946年9月）に寄稿したりしている。

その他、1946年1月の米国経済学会での報告で、シュンペーターは「経済学の科学的性格を信じる経済学者にとっての最大の名誉は、手頃な数の変数を結びつけた手頃な数の方程式を使って、経済過程に関する必要不可欠な点をくまなく明示するような簡単なモデルを構築することに成功したときに、満たされるだろう」⁶³⁾と述べた。しかし、後年G.スティグラーから「シュンペーターは広大な学識を有し、非常に聡明であったが、小さな欠点といえば、いっばしの抽象的な経済理論家気取りでいたことだ」⁶⁴⁾と辛辣な批判を浴びる。

われわれは、このような批判にどう応えたらよいのだろうか。例えば、塩野谷は、「かりにスティグラーの評価が一面において正しいとしても、重要なことは、その『小さな欠点』がもたらした大きな帰結である。それは、シュンペーターのような人物が理論経済学の分野において専門家として振舞ったことによって、理論経済学プロパーからけっして生まれないような規模の大きな異端的な発想がその分野に残されたということである」⁶⁵⁾と述べ、シュンペーターが経済学界で果たした役割を逆に高く評価している。

確かに、塩野谷のような結果からみた評価も必要だが、シュンペーターが著作活動をした時代は、まだワルラス体系の形式上の理解すら進んでなかったことを斟酌すると、かつてジェフリー・M.ホジソンがその著『進化と経済学』（1993年）の中で下した評価は、適切なものだと思われる。すなわち、「全体的にみて、シュンペーターの理論体系の内部には明らかな限界や、内在的な問題や、論理的な矛盾があるけれども、疑いもなく彼は傑出した理論経済学者の一人である。ワルラス的な土壌に動態的な理論体系を真剣に育てようとする不幸な試みにもかかわらず、シュン

ペーターは動態的な経済学体系の理論家にとって価値ある着想の源であり続けているし、さらなる発展のための洞察や潜在力に満ちている」⁶⁶⁾と。

シュンペーターは、それまでの米国での業績に加えて、1940年には計量経済学会会長、1947年には米国経済学会会長に就任、1949年には国際経済学会会長に選出される。

ここでわれわれは、計量経済学的发展においてシュンペーターの果たした役割を確認しておきたい。彼が計量経済学を高く評価していたことはわかっているが、どこまで理解していたかは不明だからである。もちろん、彼が経済学における数学の価値を無視してしまっただけではない。それどころか、幾分皮肉を込めて W. レオンチエフが言ったように、「シュンペーターは、数学的方法は近代経済学者の工具箱の中にあって欠くことのできない、最も有用な道具の一つだという見解をより広くいきわたらせるのに、非常に大きな任を果たしてきた」⁶⁷⁾といえる。

計量経済学の歴史を繙けば、ヘンリー・ムーアによって1911年に創始され、約1世紀を経て目覚ましい発展を遂げ、理論経済学の一大部門にまで成長した。この点については、この計量経済学において近代的統計方法を適用するに当たり、ノールウェーの経済学者ラグナー・フリッシュの果たした役割は重要である。シュンペーターと計量経済学会とのかわりについては後日、フリッシュが追悼論文 (*Économie Appliquée* 誌、第3巻第3-4号、1950年7-12月)の中で述べているが、それはそうとして、一つのエピソードだけを紹介しておこう。

シュンペーターの教え子のサミュエルソンによれば、シュンペーターはフリッシュ＝ティンバーゲン型の混合・差分・微分方程式が、サイン曲線的な周期性を発生させる複雑な指数を含んでいることを、やや神秘的な事柄として受け取っていたようである。その上

で、サミュエルソンはいくぶん皮肉を込めてシュンペーターを批評する。「数学自体は物理学の侍女として成長してきたものであって、経済学に適合するようにはできてないのだから、経済理論の真の意味での前進は、経済学に適合するように意図して作られた新しい方法を必要とするだろうというのがシュンペーターの堅い信念であった。彼のこのような見通しは、現にフォン・ノイマン＝モルゲンシュテルンの『ゲームの理論』の中に実現しつつあるものを、ある意味で予見したものとイえる。この理論は、現代数理物理学の用具を全く不要にし、点集合論や位相論のもっと基本的な考え方に依拠せんとするものにほかならない」⁶⁸⁾と。

ところで、シュンペーターがウィーン大学に入学したのは1901年である。限界革命の洗礼を受けたものの、その当時の確率論と推測統計学の置かれた立場は、まだまだ未熟なものであった。近代統計学の確立は1920年代まで待たねばならない。このように時代背景を省みれば、シュンペーターがウィーン大学で学んだ1901年からハーバード大学へ職を求めて移った1932年までは、ちょうど限界革命と計量経済学、数理経済学、経済統計学の黎明期との狭間であって、彼にとっては不毛な時代であったといわねばならない。

4-3. シュンペーター没

それは、世界一を求めてやまない数奇な生涯だったのかもしれない。シュンペーターの死はある日突然やってきた。1950年1月8日早朝、睡眠中に脳溢血を引き起こし、帰らぬ人となった。享年66歳。彼が構想していた総合的社会科学に関する全貌を公にすることなく生涯を閉じたことは、悔やまれてならない。恐らく彼の頭の中には、経済社会学はもとより、進化経済学に関する一般理論が練り上げられていたに違いない。

シュンペーター夫人の意思に基づいて、彼

の残した蔵書は、ボン大学と一橋大学に寄贈された。これは主に米国に渡ってから入手したり献本されたりしたものを中心だが、その整理を任された一人である東畑によれば、「シュンペーターが書物に書き入れの紙片を挿入していることで彼の関心を測るならば、恐らくどの部門の書物に対するよりも、数学書の方が最も多いことが、これを示すかのようである。ハーヴァードに移ってから後に（或いはそれ以前からであるかもしれない）、彼は相当の年齢になってから高等数学の研究を始めたと聞いた事があるが、この目録はそのことを十分に想像せしめるものがある」⁶⁹⁾と感慨深く述べている。

これまで概観したように、彼の米国での人生は表面的にはともかく、内面的には、決して幸せなものだったとはいえない。その一端として、例えば、後にケインズ経済学の伝道者の一人になったハリスが自ら編集したシュンペーターの追悼論文集『社会学者シュンペーター』（1951年）の中で、次のように述懐をしている。「大学におけるシュンペーターの威信は、思ったほどでもなかった。これは、シュンペーター自身の落ち度によるところが少なくないのであって、彼の短所を示すものであることは否定できない。シミッツも指摘しているように、シュンペーターは自分より若い人や年上の人とは大変うまく行ったのに、同年輩の者とはしっくり行かなかったようである。経済学部では彼が偉大な学者であることは広く一般に知れ渡っていたけれども、大学全体となるとそうではなかった。彼が時として駆け引きに欠けていたことや、自己顕示癖をもっていたことや、いつも注目的になることを望んでいたことや、同僚のある者に対する軽蔑の気持ちをあまり上手に包み隠そうとしなかったことや、学生たちや若い同僚たちからの人気を一身に集めていたことなどは、同年輩の人びとのある者を遠ざけたり、ひいては彼の影響力を減少さ

せたりする結果となった。学部における彼の影響力が驚くほど小さかったことは事実である」⁷⁰⁾。

残念ながら、意欲的に何事もこなしていたかのようにみえたハーバード大学では、必ずしも同僚と馬が合わず、意外に威光は低かったようである。そういえば、彼の祖国の崩壊や二度にわたる世界大戦で受けた心のトラウマを癒すことができず、常に鬱病に悩まされ続けたことなどが、最近のロバート・L. アレンの研究などから明らかになりつつある⁷¹⁾。

ここでシュンペーターの没後に出版された著書を数えてみると、10冊を超えている。その中で、彼の代表作をあえてあげよといわれれば、われわれは躊躇なく『資本主義・社会主義・民主主義』、『十大経済学者』、『経済分析の歴史』の3冊を推したい。なぜならば、この三部作の内容は制度としての資本主義を対象に、歴史と進化的システムから解釈を試みたものに他ならないからだ。

例えば、『資本主義・社会主義・民主主義』は過去200年にわたる資本主義の成果を実証的に研究し、そこで「成功するがゆえに崩壊する」という問題のパラドックスを展開する。そして、このシュンペーターの予言が今日、決して実現していないという批判は、すでに多くの人びとに論じられてきたところである。しかし、問題は彼の見通しの誤りではなく、シュンペーターの偉大なところは、資本主義に関する真の理論が存在しないあの当時に、あえてチャレンジし、それが社会主義へ体制変換するエネルギーを内包していると疑わなかった点にあったといえる。

次に『十大経済学者』はそのタイトルが示しているように、マルクスにはじまり、ワルラス、メンガー、マーシャル、パレート、ベーム・バヴェルク、タウシッグ、フィッシャー、ミッチェル、ケインズの10名と、付録にクナップ、ヴィーザー、ボルトキヴィッツの3名を加えた13名の経済学者の

評伝である。このように考えると、シュンペーターは、単に経済史の理論を提供したのではなく、理論家の経済史観を明示したともいえる。経済学界ではケインズの『人物評伝』(1933年)と双璧をなすものといってよい。

われわれに言わせれば、この『十大経済学者』の中で彼が一番力を入れて書いたのは非合理的体系についてのパレートの業績だが、しかし、ストックホルム学派の祖師G.K. ヴィクセルがこの本に加えられてないのに不満を感じる。ヴィクセルは、リカードウによって代表される労働価値説に批判を加えつつ、ワルラスによって創始された一般均衡理論を最も簡明かつ正確に再編成し、同時にベーム・バヴェルクによって代表されるオーストリア学派の資本論をこれに接合しようとした経済学者である。もちろん、『十大経済学者』——もっともこれを整理し、当初の10人から3人を追加して編集したのはシュンペーター夫人——では取り上げられていないが、別のところで常に「北欧のマーシャルだ」と称したくらいシュンペーターにとっては重要な位置づけがなされているので、あえてその理由を問わなくてもよいかもしれないが、気になるところだ。

シュンペーターにとって遺著となったのが『経済分析の歴史』である。これは元々、『経済学史』(1914年)の改訂英語版として筆を起こしたが、構想が膨らみ、ついに完成をみずに終えたものである。彼の没後、これがシュンペーター夫人(『極東における経済制裁の問題』『日本と満州国の工業化, 1930-1940年』『イギリス海外貿易統計, 1697-1808年』などの著者として有名)によって編集され、出版にこぎつけたのは1954年のことであった。しかも、夫人はこの書物の出版を目前にして急逝したことを考えれば、この書物は、シュンペーター夫妻が精魂を込めて書き上げた遺著といっても過言ではない。

最近、『経済分析の歴史』の再版(1994年)に寄せたマーク・パールマンの序文を翻訳した塩野谷は、その「訳者解題」において次のように述べている。「『経済分析の歴史』は百科全書的知識を寄せ集めたものではない。その偉大さは、古代ギリシャ以来の2400年の西欧の経済と社会を背景にして、経済的知の発展を一つの物語として描くという構想力ないしヴィジョンの卓越性に求められる⁷²⁾。また、パールマン自身、「晩年のシュンペーターは『経済分析の歴史』ではもっと込み入ったことを企画した。彼は経済学を古典的な認識論というありきたりの枠組みではなく、知識社会学という動的枠組みによって説明しようとした⁷³⁾」と言及している。確かに、1986年に発足した国際シュンペーター学会での最近の発表テーマをみると、パールマンが述べているようにシュンペーターの経済動態を分析するのに、知識社会学という概念を導入し、それを内生化し解釈しようとする作業がかなり進んでいる。こうしたシュンペーター夫妻の『経済分析の歴史』は他に比べることのできない、経済学史の中で燦然と輝く金字塔である。

彼の全著作数を一瞥すると、著書および小冊子32冊、論文162本、書評63本、その他政治文書、そして関係者によって編まれた論文集などがあり、マッシモ・M. アウゲロによれば、その数は260点に上るとい⁷⁴⁾。残された原稿などの整理が今後も進めば、さらに増えることになる。出来れば、知的世界遺産として後世に伝えるため、彼の全集の企画が望まれるところだ。

問題は、シュンペーター自ら述べているように、彼の方法論も学問の進歩や経済制度の改革に伴って変遷してきている。われわれは、シュンペーターにおける資本主義の発展と変動の解明に焦点を合わせ、そこにある道具をいま一度、整理してみることを今後の課題としたい。

注

1) この件については、金指基（1988）『現代資本主義の発展と変動』八千代出版、181頁、および安井琢磨（1979年）『経済学とその周辺』木鐸社、第2部3「J. A. シュンペーター」189-90頁に負っている。

2) Seymour E. Harris, ed. (1951) *Schumpeter, Social Scientist*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, Prefatory Note, iii.

3) 金指（1996）『シュンペーター再考』現代書館、第6章「シュンペーター体系の学史的展開過程」で詳しく述べられているので、興味のある方はそちらを参照してもらいたい。なお、この一章はこれ自体、一つの論文として高く評価できるだけでなく、わが国におけるシュンペーター研究を余すところなく取り上げた最初の論文である。併せて保住敏彦（1999）「日本へのシュンペーター学説の導入と現在の研究状況」、見城幸雄先生頌壽記念事業会編『法制と文化』愛知大学文学会叢書、第4巻、愛知大学文学会、247-67頁を参照。

4) 1986年の「国際シュンペーター学会」(International Joseph A. Schumpeter Society) の発足はシュンペーター研究を国際的に広げる契機となり、それ以後の90年代前半には次のような著書が出されている。

まず、90年は、Stefan Mütze (1990), Klaus O. W. Müller (1990), Bärbel Naderer (1990), Allen Oakley (1990), Arnold Heertje & Mark Perlman (1990) があり、91年に入ってから R. L. アレンの本格的なシュンペーターの評伝 Robert L. Allen (1991) が上梓され、その後、Maria Brouwer (1991), Richard Swedberg (1991a), R. Swedberg (1991b), R. Swedberg, ed. (1991c), Chatham J. Talele (1991), Horst Hanusch, Arnold Heertje, & Yuichi Shionoya (1991), David L. McKee (1991), Eduard März (1991), 伊達邦春 (1991) などがあげられる。これまでにさまざまな研究者によって書かれたシュンペーター関係の論文108本を収録した John Cunningham Wood ed. (1991) は、シュンペーター研究に欠かすことのできないものである。

92年には Tom Bottomore (1992) をはじめ、シュンペーター関係の論文6本を収録した Mark Blaug, ed. (1992), 続いて伊東光晴, 根井雅弘 (1993), Wolfgang F. Stolper (1994), Yuichi Shionoya & Mark Perlman (1994a), Yuichi Shionoya & Mark Perlman (1994b), Nicoló

De Vecchi (1995). 塩野谷祐一 (1995) など、本格的なシュンペーター研究の開幕である。

この他にシュンペーター自身による著書、小冊子、論文、書評、その他政治文書など260本と、シュンペーターに関して書かれた1916本の著書、論文などを収めたマッシモ・M. アウゲロによる膨大な文献案内書 Massimo M. Augello Comp. (1991) や、米川紀生のシュンペーターに関する一連の研究（主に『三重大学法経論叢』1986年11月から現在に至るまでの投稿論文）が発表されている。

90年代後半には日本人が刊行したものも多くなり次のような著書が発表された。Laurence S. Moss, ed. (1996), 濱崎正規 (1996), 金指 (1996), 国際的にも評価の高い Yuichi Shionoya (1997), 塩野谷 (1998), 1943年から96年までに書かれたシュンペーター関係の著名な論文37本を収録した Horst Hanusch, ed. (1999) などがある。

2000年に入っても、シュンペーターに関する研究書の出版は衰えるところを知らない。例えば、Nathan Rosenberg (2000), Vittorangelo Orati & Shri Bhagwan Dahiya (2001), Dennis C. Mueller & Uwe Cantner (2001), John Medearis (2001), 根井 (2001), Richard Arena & Cécile Dangel-Hagnauer, eds. (2002), Jürgen G. Backhaus, ed. (2003), Mümtaz Keklik (2003), Peter Strathern (2004), David Reisman (2004), David Reisman (2005)。

2006年以降は、Hans Blokland (2006), Arnold Heertje (2006), Thomas K. McCraw (2007), Richard N. Langlois (2007), Elias G. Carayannis & Christopher Ziemnowicz, eds. (2007), Esben S. Andersen (2008), 米川編 (2008) など。これをみれば、国際的にもシュンペーターに関する研究が衰えることなく、数多く発表されている。

5) シュンペーターの伝記については、Christian Seidl (1984) *Joseph Alois Schumpeter: Character, Life and Particulars of his Graz Period*, in C. Seidl ed., *Lectures on Schumpeterian Economics: Schumpeter Centenary Memorial Lectures Graz 1983*, Berlin: Springer-Verlag, 187-205 を参照。

6) 参考までに当時のオーストリア=ハンガリー帝国の貴族制度（1919年4月3日廃止）を紹介すれば、次のとおりである。この制度は、第1社会の貴族（領主貴族）と第2社会の準貴族（叙爵による非領主貴族）にわかれ、軍、官僚、財界、学

- 界などの人びとは、第2社会に属しており、ケラーもこれに列した準貴族である。
- 7) 安井 (1984) 「訳者あとがき」, シュンペーター著, 大野忠男, 木村健康, 安井訳『理論経済学の本質と主要内容』下, 岩波文庫, 509-10 頁。
- 8) 伊達邦春 (1983.7) 「シュンペーターと最初の夫人」『別冊経済セミナー』〈シュンペーター再発見〉日本評論社, 31 頁を参照。
- 9) Erich Schneider (1970) *Joseph A. Schumpeter: Leben und Werk eines großen Sozialökonomens*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 12n.
- 10) Joseph A. Schumpeter (1951a) *Ten Great Economists, from Marx to Keynes*, New York: Oxford University Press, 93.
- 11) 詳細については、八木紀一郎 (1993.10) 「シュンペーターとウィーン大学」『経済論叢別冊—調査と研究』京都大学経済学会, 第5号, 63-83 頁。その後、一部を整理した八木 (2001) 「付録シュンペーターに関するウィーン大学資料」が J. A. シュンペーター著, 八木編訳『資本主義は生きのびるか』名古屋大学出版会, 5-16 頁に所収されている。
- 12) 安井 (1984) 「訳者あとがき」, シュンペーター著, 大野忠男, 木村健康, 安井訳『理論経済学の本質と主要内容』下, 509 頁。
- 13) この言葉はときどき, シュンペーターが20代の若い研究者に与える箴言として使われていた。シュンペーターの書物では, *Ten Great Economists, from Marx to Keynes* 中のカール・メンガーへの弔文で用いられている。Schumpeter (1951) *Ten Great Economists*, 87.
- 14) Schneider (1970) *Joseph*, 45.
- 15) ここにシュンペーターの七不思議を挙げておく。一. 処女作『理論経済学の本質と主要内容』はいづつ, どこで書かれたのか。二. 倒産したビーグーマン銀行頭取の時, 個人的に借金はいくらで, それをいつ完済したのか。三. 母校ウィーン大学になぜ戻れなかったのか。四. 同時代のケインズとの交流がなぜうまく行かなかったのか。五. なぜ資本主義は成功ゆえに, 崩壊するのか。六. 彼が描いた社会主義の真髄とは, どんなものだったのか。七. なぜ自らのシュンペーター学派をつくらなかったのか。この謎解きは今後の課題である。
- 16) William Jaffé (1973) Léon Walras's Role in the 'Marginal Revolution' of the 1870s, in R. D. Collison Black, A. W. Coats, & Craufurd D. W. Goodwin, eds., *The Marginal Revolution in Economics: Interpretation and Evaluation*, Durham, NC: Duke University Press, 116.
- 17) Philip Mirowski (1989) *More Heat than Light: Economics as Social Physics, Physics as Nature's Economics*, Cambridge: Cambridge University Press, 250. このフィリップ・ミロウスキーとは別に, ワルラスが他変数の相互依存関係を定式化するに当たって, フランスの経済学者兼土木技師 A. N. イスナール (1749-1803 年) の『富について』(1781 年) や, フランスの数学者兼物理学者 L. ボアソン (1777-1859 年) の『静力学入門』(1803 年) などから, 多大な影響を受けたという指摘もある。
- 18) ワルラスとパレートの師弟関係について述べた文献は少なく, 関係者の書簡のやり取りから推測するしかないが, 両者は必ずしも師弟の絆が強くなかったといわれている。例えば, Erich Schneider (1961, September) Vilfredo Pareto: The Economist in the Light of his Letters to Maffeo Pantaleoni, *Banca Nazionale del Lavoro Quarterly Review*, 14, 247-95 を参照。
- 19) シュンペーターの「方法論的個人主義」については, Fritz Machlup (1987) *Methodology of Economics and other Social Sciences*, London: Academic Press, 454-72 および Machlup (1951) Schumpeter's Economic Methodology, in Seymour E. Harris, ed., *Schumpeter, Social Scientist*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 100.
- 20) 塩沢由典 (1983) 『近代経済学の反省』日本経済新聞社, 335-6 頁。
- 21) 吉田昇三 (1974) 『ウェーバーとシュムペーター』筑摩書房, 87 頁。
- 22) 竹内啓 (1977.3) 「経済学の『科学性』について」『現代思想』青土社, 106 頁。
- 23) 塩野谷 (1995) 『シュンペーター的思考—統合的社会科学の構想』東洋経済新報社, 250 頁。なお併せて, 塩野谷 (1998) 『シュンペーターの経済観』岩波書店, 105-8 頁を参照。
- 24) 詳しくは, 塩野谷 (1998) 前掲書, 386-7 頁を参照。なお, J. N. ケインズについては, John Neville Keynes (1917) *The Scope and Method of Political Economy*, 4th ed. Clifton, NJ: A. M. Kelley を参照。
- 25) Schumpeter (1946, September) John Maynard Keynes: 1883-1946, *American Economic Review*, 36 (4), 495-518. なお, Schumpeter (1951) *Ten Great Economics, from Marx to Keynes*, New York: Oxford University Press, 260-91. および Schumpeter (1947) Keynes, the Economist, in S. E. Harris, ed., *The New Eco-*

- nomics: Keynes' Influence on Theory and Public Policy*, New York: A. A. Knopf, 73-101 に所収。
- 26) Mark Blaug (1962) *Economic Theory in Retrospect*, Illinois: Richard D. Irwin, 725. なお、ロビンズの方法論については、馬場啓之助が次のように位置づけている。「ロビンズはメンガー流の経済性の原理を基礎とし、この上に市場の条件、収穫逓減の法則を生みだす生産条件、さらに将来に対する予想の不確実性などの仮説を積み重ねていくことによって、経済理論の体系が構成されていく理路を明快に説明している。」馬場啓之助(1955年)『経済学方法論史』中山伊知郎他編『経済学大事典』第3巻、東洋経済新報社、292頁。
- 27) 御崎加代子(1998年)『ワルラスの経済思想——一般均衡理論の社会ヴィジョン』名古屋大学出版会、32頁。
- 28) Robert L. Allen (1991) *Opening Doors: The Life and Work of Joseph Schumpeter*, vol. 1, New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 84 を参照。詳細については、1908年10月9日付のワルラス宛の書簡などが残っているので、ワルラス研究家の William Jaffé, ed. (1965) *Correspondence of Léon Walras and Related Papers*, vol. 3, Amsterdam: North-Holland Publishing, 378-80, 385n and 421-2 およびシュンペーターの書簡集 Schumpeter (2000) *Briefe/Letters*, Ausgewählt und herausgegeben von Ulrich Hedtke und Richard Swedberg, Tübingen: Mohr Siebeck, 43 を参照。
- 29) Cf. Richard Swedberg (1991) *Joseph A. Schumpeter: His Life and Work*, Cambridge, UK: Polity Press, 22, 31-2.
- 30) 八木紀一郎(2001)「付録 シュンペーターに関するウィーン大学資料」, シュンペーター著, 八木編訳『資本主義は生きのびるか』名古屋大学出版会, 15頁。結局、中止せざるを得なかった1909年から1910年にかけての冬学期の講義テーマは、「企業者と資本家(資本主義的集中傾向とそれに対応した貨幣市場での特別の注意を払った現代国民経済分析)」と「財政学の基礎、純粋に法学的部分を除いて」である。この資料は八木に負っている。
- 31) 萩原能久(1997.6)「昨日の世界——ウィーンという大学」『三田評論』第992号, 71-2頁。併せて、八木(1988)『オーストリア経済思想史研究——中欧帝国と経済学者』名古屋大学出版会, 第9章「ウィーン大学の講義とオーストリア大学」および潮木守一(1992)『ドイツの大学——文化史的考察』講談社学術文庫を参照。
- 32) 萩原(1997.6)前掲論文, 72頁。
- 33) 萩原(1997.6)前掲論文, 73頁。
- 34) Schumpeter (1939) *Business Cycles: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process*, vol. 1, New York: McGraw-Hill, 21n and 46n. および Schumpeter (1954) *History of Economic Analysis*, ed. from manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York: Oxford University Press, 968n, 1006-9, and 1014n.
- 35) 谷嶋喬四郎(1980)「大きな問題提起の書」, シュンペーター著, 谷嶋訳『社会科学の未来像』講談社学術文庫, 197-227頁。
- 36) 塩野谷(1995)『シュンペーター的思考』72頁。
- 37) 森嶋外(1912.10.27)「Graz 大学で理財学教授 Schumpeter が苛酷なので学生が反抗した」『椋鳥通信』第44回, (『スバル』第5年第1号, 1913年1月1日, 岩波書店刊行の森(1952)『鷗外全集』著作篇, 第22巻, 361頁に所収)。私の知る限り、これをはじめで紹介したのは東畑精一である。東畑は小泉信三さんに聞いたことがあるとあって東畑(1950.2.2)「シュンペーター先生の思い出(1)」『東京大学学生新聞』および東畑(1950.2.16)「シュンペーター先生の思い出(2)」『東京大学学生新聞』で語っている。
- 38) この件については、Robert L. Heilbroner (1999) *The Worldly Philosophers: The Lives, Times, and Ideas of the Great Economic Thinkers*, rev. 7th ed., New York: Simon & Schuster, 298 を参照。
- 39) 安井(1992)「交流半世紀——伊達邦春君と私」, 大石康彦, 福岡正夫編『経済理論と計量分析——伊達邦春教授古稀記念論文集』早稲田大学出版部, 4頁。
- 40) 詳細については、Robert L. Allen (1991) *Opening Doors: The Life and Work of Joseph Schumpeter*, 2 vols., New Brunswick, NJ: Transaction Publishers. Thomas K. McCraw (2007) *Prophet of Innovation: Joseph Schumpeter and Creative Destruction*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press. Heinz D. Kurz (2005) *Joseph A. Schumpeter: Ein Sozialökonom zwischen Marx und Walras*, Marburg: Metropolis-Verlag. 坪井賢一(2009.9.10)「めっちゃくちゃわかるよ経済学——シュンペーターの冒険編」〈<http://diamond.jp/series/Schumpeter/ln.html>〉, 米川紀生

- (1993.9)「大蔵大臣としての J. A. Schumpeter の思想と行動」『社会思想史研究』第 17 号, 89-95 頁を参照。
- 41) Heinz D. Kurz (2005) *Joseph A. Schumpeter: Ein Sozialökonom zwischen Marx und Walras*, Marburg: Metropolis-Verlag, 22.
- 42) 当時のシュンペーターの負債額については, Eduard März (1983) *Joseph Alois Schumpeter: Forscher, Lehrer und Politiker*, München: R. Oldenbourg Verlag, Vorwort, 12 による。
- 43) このような見解を述べたのは小谷義次である。小谷 (1983)「解説」, シュンペーター著, 木村元一, 小谷訳『租税国家の危機』岩波文庫, 123-40 頁を参照。
- 44) 神野直彦 (2002)『財政学』有斐閣, 54 頁。
- 45) 伊東光晴, 根井雅弘 (1993)『シュンペーター—孤高の経済学者』岩波新書, 187 頁。
- 46) 都留重人 (1956)「現代の人と学説 I — シュンペーター」, 岸本誠二郎, 都留監修『講座近代経済学批判 — 近代経済学の基本的性格』第 1 卷, 東洋経済新報社, 306 頁。
- 47) このように帝国主義というあいまいな言葉づかいに対する批判は, 大野忠男 (1971)『シュムペーター体系研究』創文社, 314 頁に負っている。
- 48) このとき, 河合榮次郎の果たした役割については, 玉野井芳郎 (1972)「シュムペーターの今日的意味」, シュムペーター著, 玉野井監修『社会科学の過去と未来』ガイヤモンド社, 27-33 頁および玉野井 (1971)『日本の経済学』中公新書, 107-8 頁を参照。併せて, 河合 (1969)「日記 I」『河合榮次郎全集』第 22 卷, 社会思想社, 168 頁以降を参照。
- 49) ボン大学就任時代のシュンペーターについては, Robert L. Allen (1991) *Opening Doors: The Life and Work of Joseph Schumpeter*, vol. 1, New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 201-4, および米川紀生の次のものを参照されたい。「Bonn 大学着任後彼は最愛の母を葬るため一度 Winn へ帰ったきり, 以後二度と Winn の土を踏むことはなかった。何故彼は母国へ再びもどることをしなかったのか。彼は主観的には Winn へ帰りたかった。だが, 巨額の借財を負う身では客観的に帰れなかったのである。1929 年 1 月 29 日の Haberler 宛書簡で J. A. Schumpeter は, 『脱税逃亡者 (Steuerflüchtling)』としての我が身を嘆いた。彼は租税亡命者として Bonn 生活をおくらねばならなかった」米川 (1990.3)「Bonn における Joseph Alois Schumpeter」『法経論叢』第 7 卷第 2 号, 三重大学社会科学学会, 65 頁。
- 50) Schneider (1970) *Joseph*, 49.
- 51) 都留 (1950)『アメリカ遊学記』岩波新書, 111 頁。
- 52) シュンペーター来日時の事情を詳しく知りたい方は, 米川編 (2008)『シュンペーター』〈人物書誌大系 39〉, 日外アソシエーツ, 133-8 頁を参照。
- 53) 都留, 伊東, 根井 (2000.2)「鼎談 シュンペーター新発見」『経済セミナー』31 頁。ただし, 『ウィーン精神』を著した W. M. ジョンストンによれば, シュンペーターは非ユダヤ人でカトリックの人に分類されている。William M. Johnston (1972) *The Austrian Mind: An Intellectual and Social History, 1848-1938*, Berkeley: University of California Press, 269.
- 54) Paul M. Sweezy (1951) Editor's Introduction, in *J. A. Schumpeter, Imperialism and Social Classes*, Trans. Heinz Norden, New York: Augustus M. Kelley, xxii.
- 55) 都留 (1964)『近代経済学の群像』日本経済新聞社, 192 頁。また, 最近刊行された都留 (2001)『都留重人自伝 — いくつもの岐路を回顧して』岩波書店, 29 頁を併せて参照されたい。
- 56) Samuelson (1946) Lord Keynes and the General Theory, *Econometrica*, 14 (3), 187.
- 57) この間の事情については, 都留 (1998)『科学的ヒューマニズムを求めて』新日本出版社, 45-55 頁に詳しく語られている。なお, この部分の初出は都留 (1996.6.11)「『一般理論』は, 実は衝撃ではなかった」『エコノミスト』93-7 頁に所収。
- 58) Don Patinkin & J. Clark Leith, eds. (1977) *Keynes, Cambridge, and the General Theory: The Process of Criticism and Discussion connected with the Development of the General Theory: Proceedings of a Conference/ held at the University of Western Ontario; Sponsored by the University of Western Ontario, the Hebrew University of Jerusalem, the Canada Council*, London: Macmillan, 100.
- 59) Patinkin & Leith, eds. (1977) *Keynes*, 100.
- 60) Patinkin & Leith, eds. (1977) *Keynes*, 101.
- 61) Heilbroner (1999) *The Worldly*, 291.
- 62) Schumpeter (1939) *Business*, Preface, vi.
- 63) Schumpeter (1946, May) The Decade of the Twenties, Paper and Proceedings of the *American Economic Review*, 36 (2), 3.
- 64) George J. Stigler (1988) *Memories of an Unregulated Economist*, New York: Basic Books, 100.

- 65) 塩野谷 (1995) 『シュンペーター的思考』 369 頁。
- 66) Geoffrey M. Hodgson (1993) *Economics and Evolution: Bringing Life Back into Economics*, Cambridge, UK: Polity Press, 151.
- 67) Wassily W. Leontief (1950, April) Joseph A. Schumpeter (1883-1950), *Econometrica*, 18, 109.
- 68) Paul A. Samuelson (1951) Schumpeter as a Teacher and Economic Theorist, in Seymour E. Harris, ed., *Schumpeter, Social Scientist*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 49.
- 69) 東畑 (1962) 「由来記」 *The Catalogue of Prof. Schumpeter Library*, 一橋大学, x 頁。
- 70) Harris, ed. (1951) *Schumpeter*, 6.
- 71) 詳しくは, Robert L. Allen (1991) *Opening Doors: The Life and Work of Joseph Schumpeter*, 2 vols., New Brunswick, NJ: Transaction Publishers を参照。その他, Richard Swedberg (1991) *Joseph A. Schumpeter: His Life and Work*, Cambridge, UK: Polity Press をあげることができる。
- 72) 塩野谷 (2004.8) 「訳者解題」, マーク・パールマン序文, 塩野谷訳「シュンペーター『経済分析の歴史』」『思想』岩波書店, 107-8 頁。
- 73) Mark Perlman (1994) 'Introduction,' in Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, reprinted ed., London: Routledge, xxiv.
- 74) Massimo M. Augello, comp. (1991) Works by Schumpeter, in Richard Swedberg, ed., *Joseph A. Schumpeter: The Economics and Sociology of Capitalism*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 445-81.